平成21年度

市原市内遺跡発掘調査報告

山木遺跡群市道地区第２地点
郡本遺跡群（第13次）
村上遺跡群門前地区
白船城跡（第６次）
菊間遺跡群鍛治屋前地区第２地点

２０１０

市 原 市 教 育 委 員 会

序　　文

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。縄文時代の大貝塚群をはじめ、「王賜」銘鉄剣や史跡上総国分寺跡、西願寺阿弥陀堂など各時代を代表する数々の文化遺産は、これら先人の足跡を今に伝えています。

本市は、昭和30年代後半から石油化学を中心とする企業が湾岸の埋立地へ進出してきたことにより、それまで農業・漁業を中心としてきた社会経済構造は大きく変化し、人口の増加と都市化が急速に進展しました。このような中、先人達の残した貴重な文化財を保護・保存するために、各種の調査を実施しています。

本報告書は、平成21年度に国及び県の補助を受けて実施した、個人住宅の造成に伴う遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

終りに、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導並びにご協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成22年3月

市原市教育委員会
教育長　山　崎　正　夫

例　　言

1　本書は、国庫および県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。

2　発掘調査および整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　本報告書所収の調査は下記の通りであり、所在地などの諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。

⑴　山木遺跡群市道地区第2地点（調査コード　セ447）　確認調査　43.0㎡／435.24㎡・本調査7㎡
調査期間：平成21年4月20日～4月30日　調査担当：髙橋康男

⑵　郡本遺跡群第13次（調査コード　セ452）　確認調査　26.5㎡／265.36㎡・本調査2㎡
調査期間：平成21年9月9日～9月18日　調査担当：近藤　敏

⑶　村上遺跡群門前地区（調査コード　セ453）　確認調査　43.0㎡／422.14㎡・本調査7㎡
調査期間：平成21年9月24日～10月2日　調査担当：牧野光隆

⑷　白船城跡第6次（調査コード　セ455）　確認調査　35.9㎡／359.49㎡・本調査10㎡
調査期間：平成21年10月13日～10月21日　調査担当：髙橋康男

⑸　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点（調査コード　セ456）　確認調査　45.0㎡／445.34㎡・本調査22㎡
調査期間：平成21年11月16日～11月30日　調査担当：髙橋康男

4　本書の編集・執筆は、牧野光隆が担当した。

5　郡本遺跡群（第13次）出土の中世遺物の分類は櫻井敦史が行った。

6　調査に際しては、基準点測量を実施していない。そのため、図中に示す座標値(平面直角座標第IX系・日本測地系)及び北方位は地形図等から求めたものであり、厳密なものではない。また、各遺跡全体図中に１点のみ世界測地系変換座標(TKY2JGD ver.1.3.79による)を記した。水準については、近隣の既知点より求めて使用した。

本文目次

1　調査遺跡の位置 …… 1
2　山木遺跡群市道地区第2地点 …… 2
3　郡本遺跡群（第13次） …… 7
4　村上遺跡群門前地区 …… 14
5　白船城跡（第6次） …… 17
6　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点 …… 20
7　出土遺物観察表 …… 26

挿図目次

第１図　調査遺跡位置図 …… 1
第２図　山木遺跡群周辺地形図 …… 2
第３図　山木遺跡群市道地区全体図 …… 3
第４図　1トレンチ実測図・出土遺物 …… 4
第５図　2トレンチ実測図・出土遺物 …… 5
第６図　3トレンチ実測図・出土遺物 …… 6
第７図　郡本遺跡群周辺地形図 …… 7
第８図　郡本遺跡群（第13次）全体図・1トレンチ実測図 …… 8
第９図　2トレンチ実測図・出土遺物 …… 9
第10図　3トレンチ実測図・出土遺物⑴ …… 10
第11図　3トレンチ出土遺物⑵ …… 11
第12図　村上遺跡群周辺地形図 …… 14
第13図　村上遺跡群門前地区全体図 …… 15
第14図　1・2トレンチ実測図・出土遺物 …… 16
第15図　白船城跡周辺地形図 …… 17
第16図　白船城跡（第6次）全体図、各トレンチ土層断面図・出土遺物⑴ …… 18
第17図　1・4トレンチ出土遺物⑵ …… 19
第18図　菊間遺跡群周辺地形図 …… 20
第19図　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点全体図 …… 21
第20図　1トレンチ実測図 …… 22
第21図　1トレンチSI01遺物分布図 …… 23
第22図　1トレンチSI01出土遺物⑴ …… 24
第23図　1トレンチSI01出土遺物⑵ …… 25

図版目次

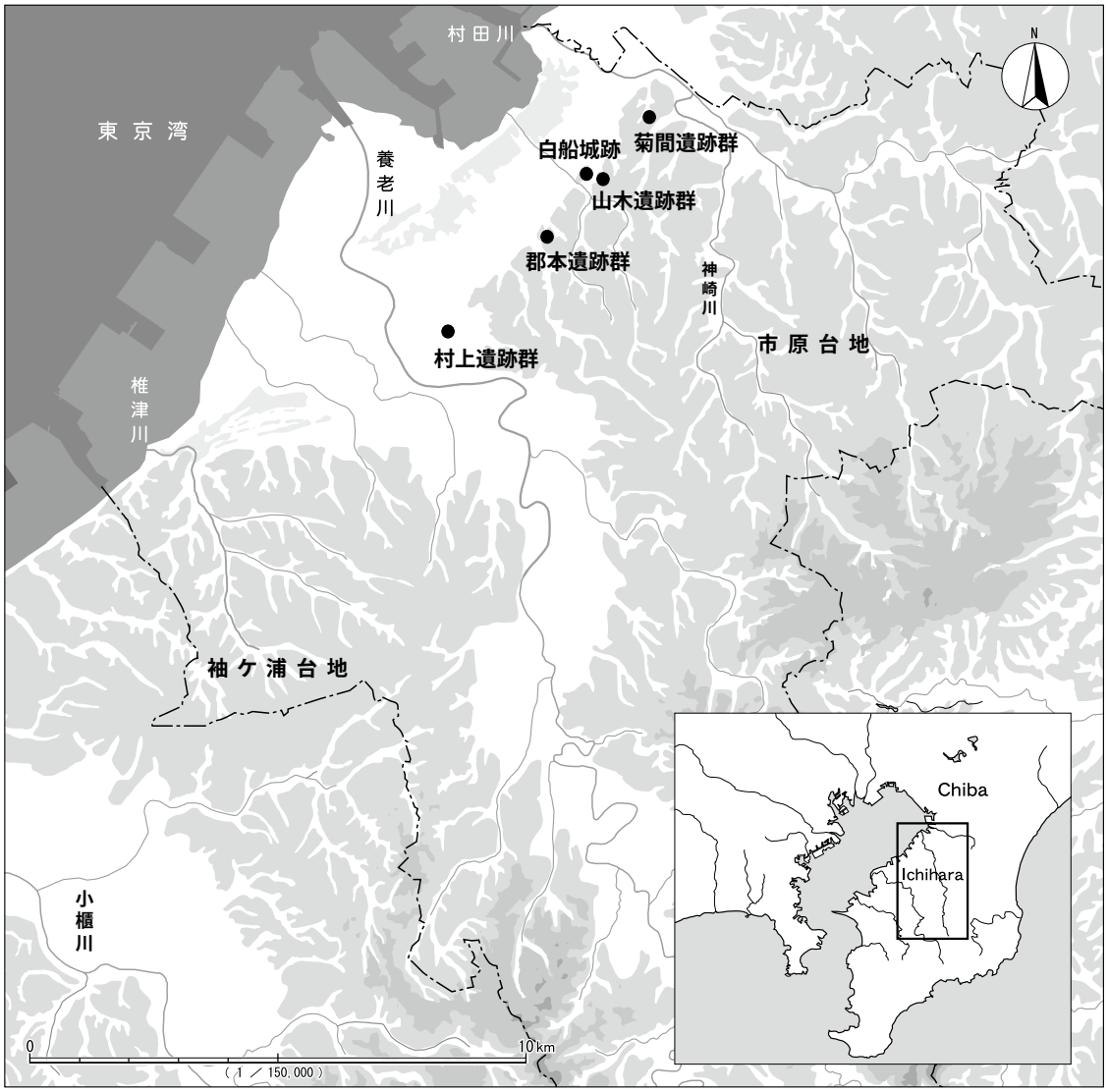
図版１　山木遺跡群市道地区第2地点
図版２　郡本遺跡群（第13次）
図版３　郡本遺跡群（第13次）、村上遺跡群
図版４　白船城跡（第6次）、菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点
図版５　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点
図版６　山木遺跡群・郡本遺跡群 出土遺物
図版７　郡本遺跡群・白船城跡・菊間遺跡群 出土遺物
図版８　菊間遺跡群・山木遺跡群・郡本遺跡群 出土遺物
図版９　郡本遺跡群 出土遺物
図版10　村上遺跡群・白船城跡・菊間遺跡群 出土遺物

1　調査遺跡の位置

平成21年度は、山木遺跡群・郡本遺跡群（第13次・第14次）・村上遺跡群・白船城跡・菊間遺跡群の５遺跡６地点を調査し、そのうち5地点分を整理報告する。郡本遺跡群の第14次調査は、平成22年2月8日から調査を開始しているため、次年度の整理報告とした。

市原市は南北に約35kmと細長い行政区画を有し、養老川が南北を縦貫する。その養老川が開析した台地の右岸を市原台地、左岸を袖ケ浦台地と通称する。東京湾岸の埋立地は京葉臨海工業地帯の一角を担い、流通網の大動脈である国道16号線が走る。やや内陸に入った旧海岸線沿いの砂堆上にJR内房線が敷設され、北から八幡宿・五井・姉ヶ崎の３駅を擁する。そのような環境から、市域北部の市街化区域には人口が集中し、都市化が進んできた。

今年度報告する5か所は、いずれも個人住宅建設に伴う調査であり、養老川右岸の市原台地が海にのぞむ北西端部に並ぶ形になっている。菊間・山木・郡本・村上はいずれも埋蔵文化財の密度が高いエリアであり、郡本と村上は上総国府推定地としても知られている。



第1図　調査遺跡位置図

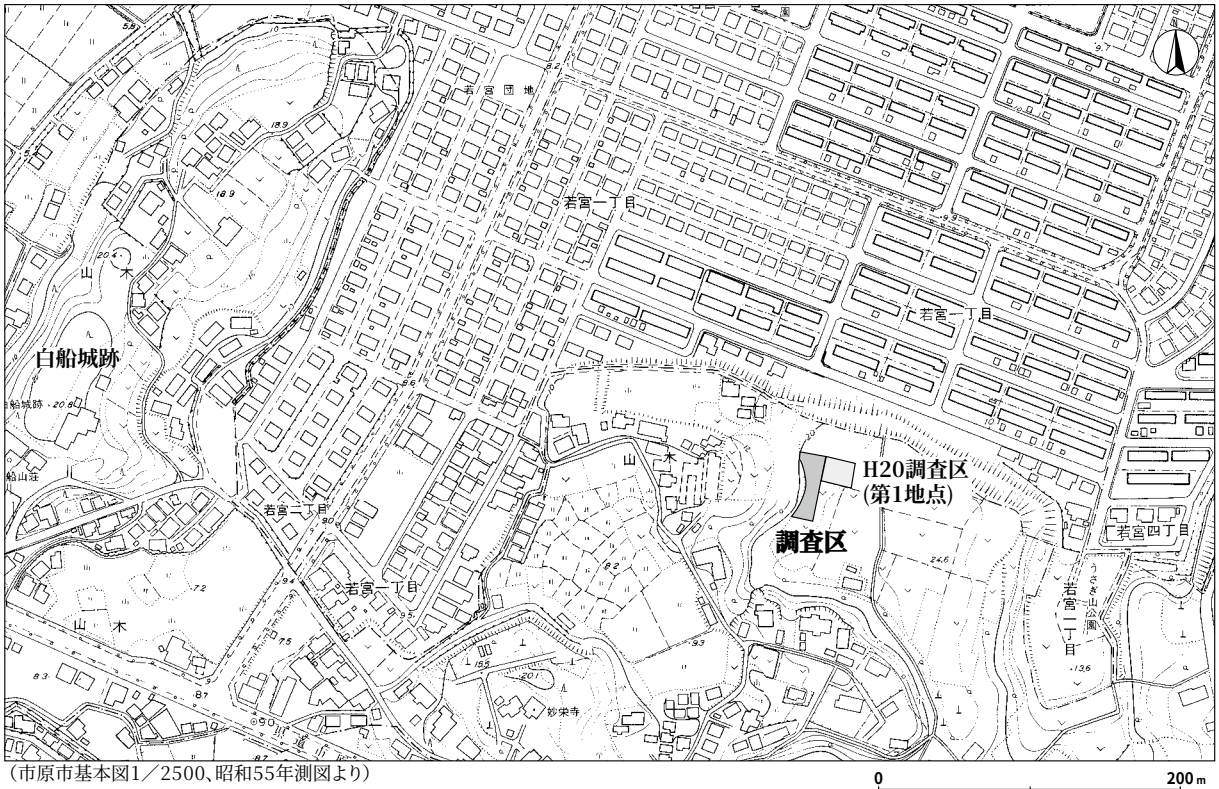
2　山木遺跡群市道地区第2地点　（遺構：図版1／出土遺物：図版6・8）

遺跡の位置と周辺の遺跡　八幡の海岸線から2.1km南西の台地上で、標高は20～25m前後を測る。北西130mでは、昭和41年に若宮団地の造成に先立ち、若宮遺跡Ａ区として近世の塚2基と古墳時代前期の竪穴建物跡の一部が調査されている。その造成によって、この台地の北半が大規模に削平された結果、調査区から25m北側は断崖となった。眼下に広がる若宮一丁目との現比高差は11.4mである。字名は「いちみち」と読むが、由来などは判然としない。西方440mには独立丘陵を利用した中世戦国期の白船城跡があり、さらにその西側には市原条里制遺跡がひろがる。

昨年度に東側隣接地（第1地点と呼称）を調査しており、今回の調査でも検出した奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱穴2基や竪穴建物跡7軒をはじめ、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡を確認している。周辺調査では、出戸地区や山木深堀遺跡・白船城跡第1次調査などにおいて奈良・平安時代の遺構を検出しており、付近は奈良・平安時代の遺跡分布が色濃い地域である。このことは、山木遺跡群の南側の谷を隔てた対岸一帯に広がる光善寺廃寺や古甲遺跡などで知られる郡本遺跡群(上総国府推定地)の存在との強い関連性を示すものであろう。

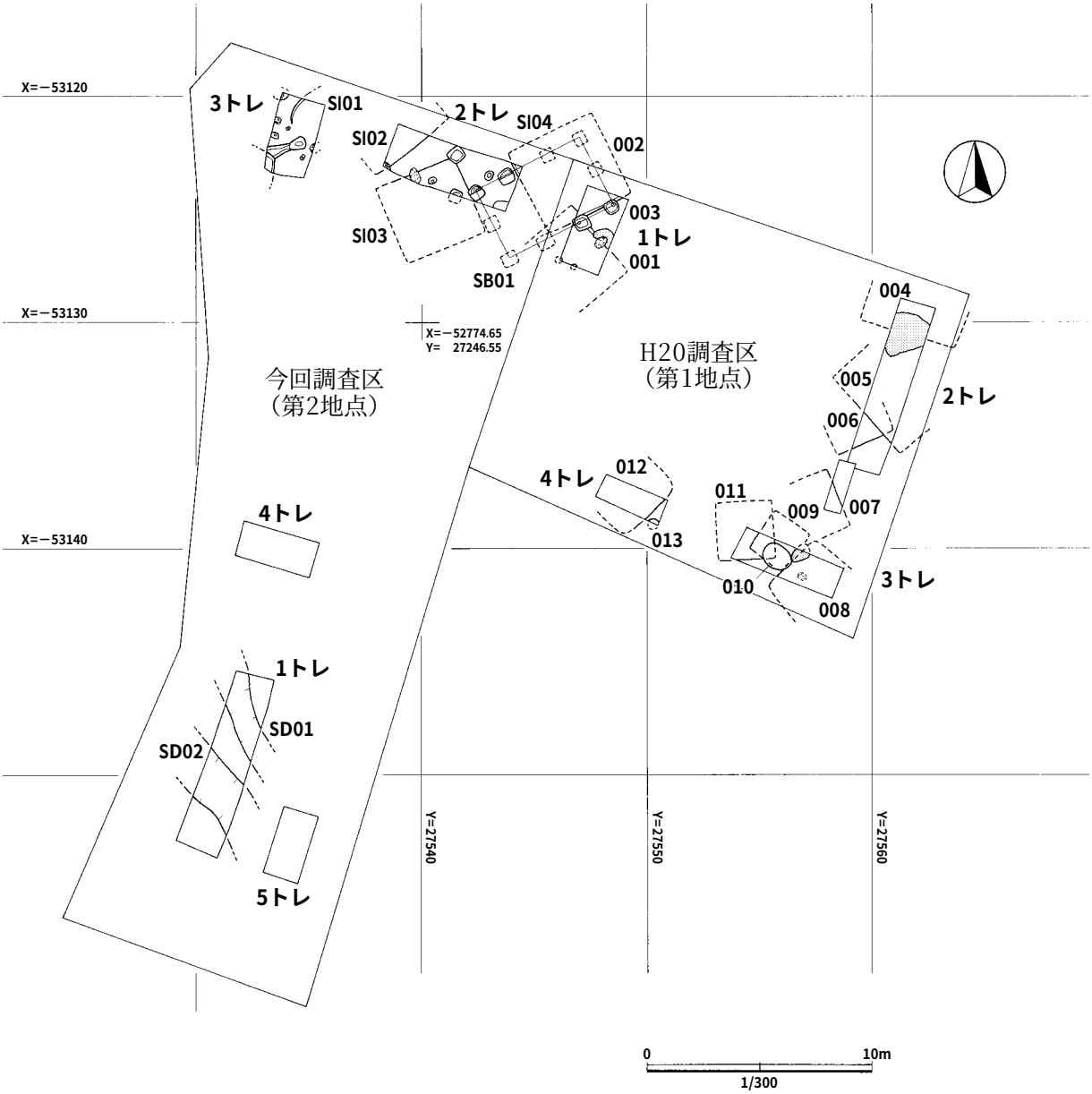
調査概要　個人住宅建設に起因する確認調査を実施し、トレンチは母屋の基礎を避ける形で設定した。浄化槽部分（3トレンチ）については本調査とした。調査区は南北に約40mと長く、現地形は西側の谷に落ちていく縁辺部の緩斜面となる。調査区北側の東寄りの現地表面標高は22.5m、西で21.8m前後であり、谷に向かって緩く傾斜している。遺構名は整理作業時において遺構種別に変更した。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物跡1軒（SI01）、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒（SI02）、奈



（市原市基本図1／2500、昭和55年測図より）

第2図　山木遺跡群周辺地形図

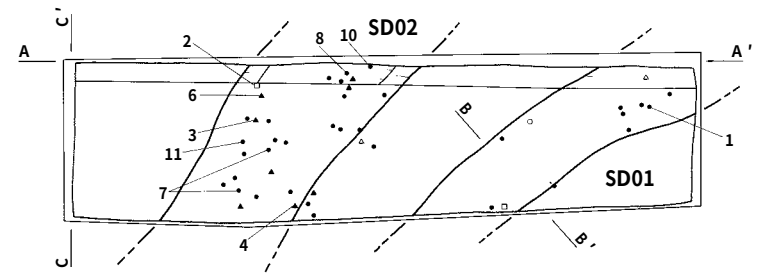


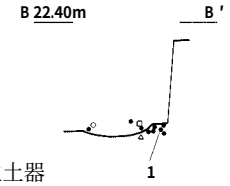
第3図　山木遺跡群市道地区全体図

良・平安時代の掘立柱建物跡1棟（SB01）・竪穴建物跡2軒（SI03・04）・土坑3基（SK01～03）・溝跡2条（SD01・02）を確認した。

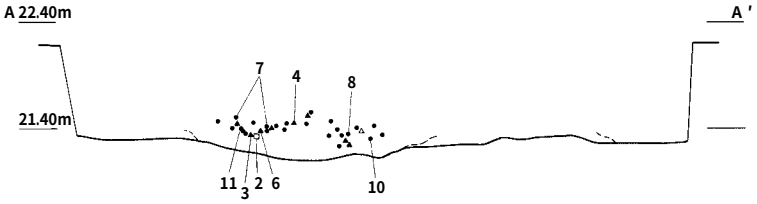
遺構と遺物　1トレンチの遺構確認面は現地表面から1.4mと深く、断面形状がゆるやかな溝跡2条を確認した。SD01は、軸方位N-23°-Wで、幅0.96～1.0m、長さ4.2mにわたり確認され、確認面からもっとも深い部分で深さ16cm程度であり、浅い。出土遺物には弥生土器や第4図1の古墳時代前期の高杯から灰釉陶器など、時期に幅がみられる。

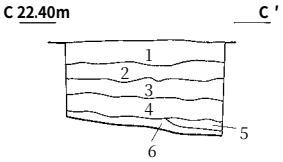
SD02は、軸方位N-40°-Wで、SD01よりも西に傾く。幅1.5～1.76m、長さ3.8mにわたり確認され、最大深さ40cmであり、底面の一部に硬化面がみられた。出土遺物の大半は覆土上層の確認面付近で検出されており、第4図2の緑釉陶器や3～6の須恵器、7～11のロクロ土師器の杯や小型器種などが

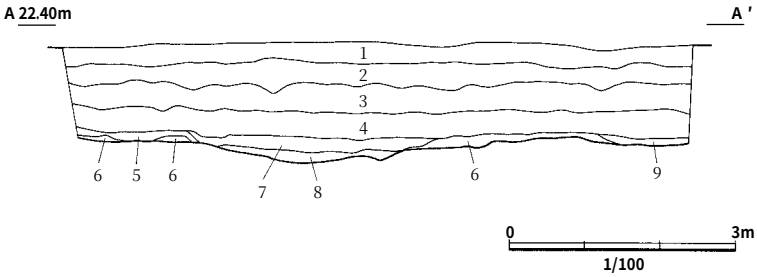




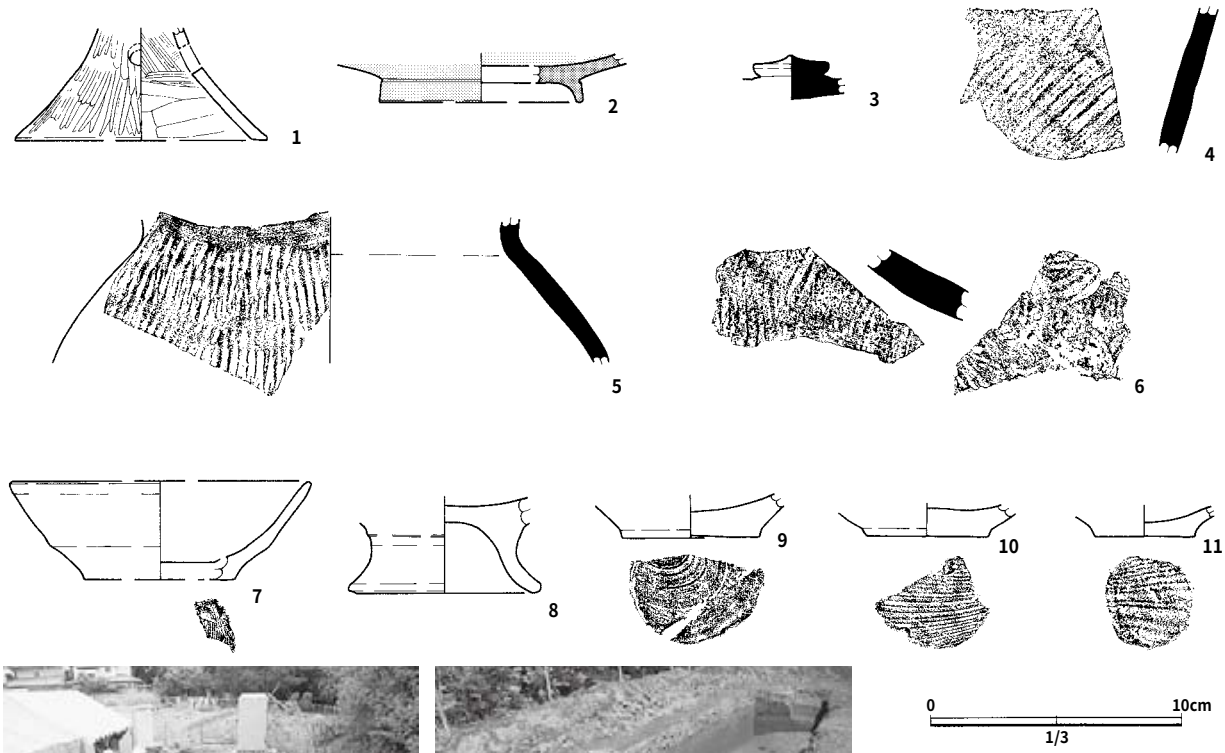
◦ 弥生土器
• 土師器
▲ 須恵器
▫ 灰釉陶器・緑釉陶器
▵ その他







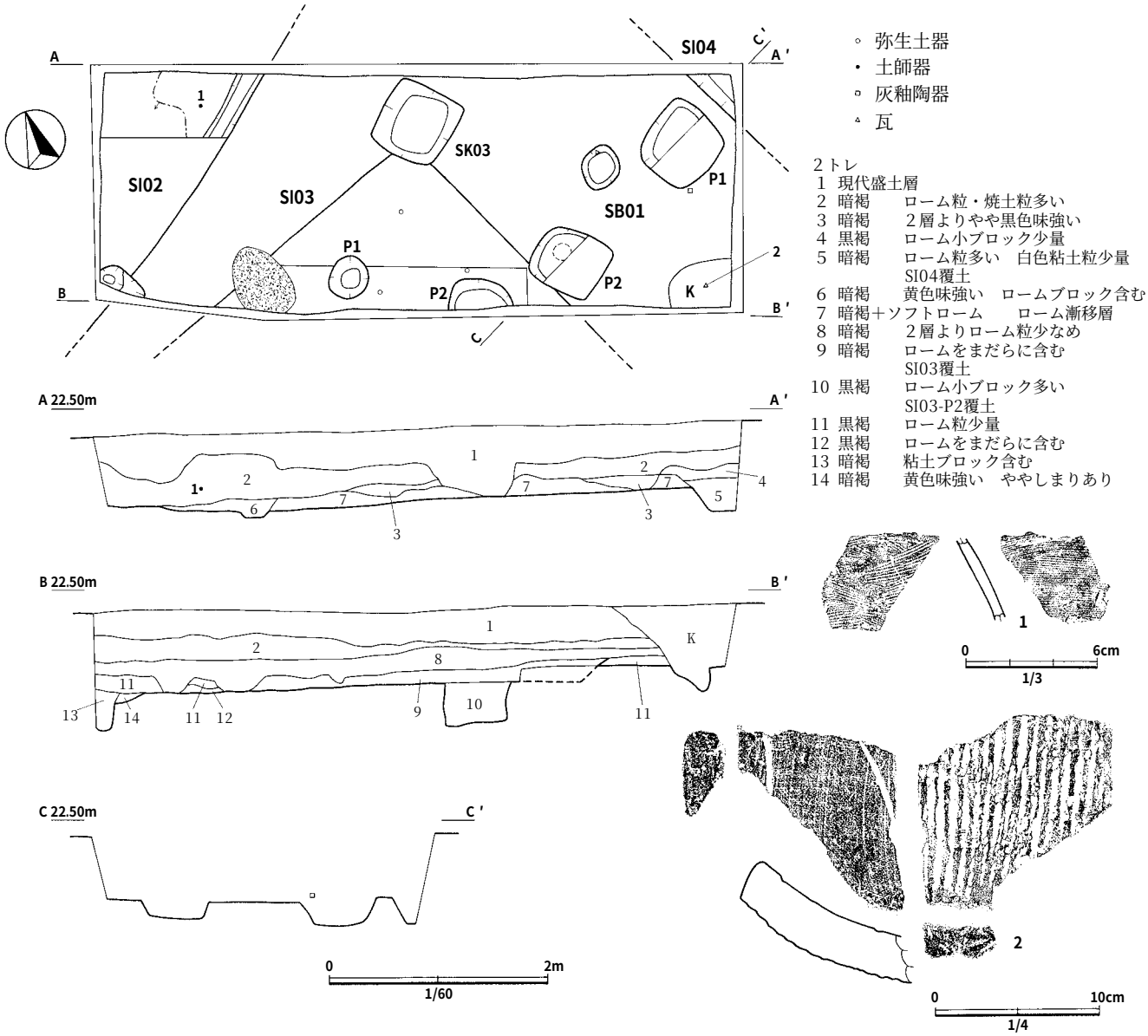
1トレ
1 現代盛土層
2 暗褐　ローム微粒多い　焼土粒・炭化物粒少量
3 暗褐　２層より黒色味強い　ローム粒２層より少なめ
4 黒褐　ローム粒少量
5 暗褐　やや黄色味強い
6 暗褐＋ソフトローム　ローム漸移層
7 黒褐　４より黒色味強い　ローム粒少量　SD02覆土
8 暗褐　やや黄色味強い　ロームブロック　SD02覆土下層底面が部分的に硬化する
9 黒褐　４層に近似するがロームをまだらに含む　SD01覆土



1トレンチ調査風景　北北東から

1トレンチ遺物出土状況　南から

第4図　1トレンチ実測図・出土遺物

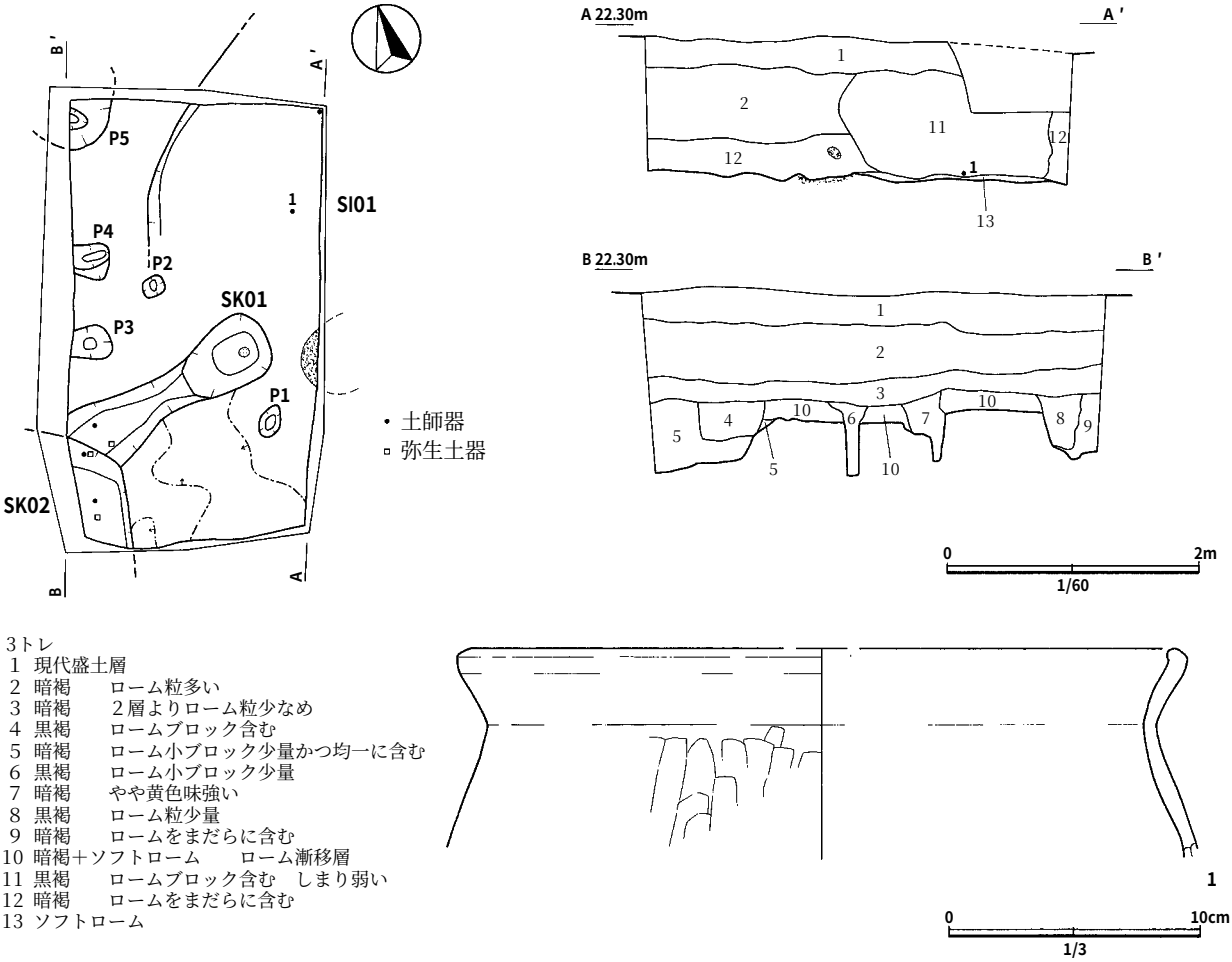


第5図　2トレンチ実測図・出土遺物

あるが奈良・平安時代の遺物が多い。硬化面がすなわち路面を意味するかどうかは判断できないが、集落の縁を谷沿いに移動する通路であったのかもしれない。

2トレンチは第1地点1トレの西側に近接している。昨年度検出した003掘立柱建物跡と軸向きをほぼ同じくする柱穴が、2基検出された（SB01）。主軸はN-63 °-Eであり、昨年度報告時より西に4度振れているが、配置や掘り形の平面形状などからみて、同一の建物跡とみなすことができる。第3図全体図には2間×3間のプランを想定して復元してあるが、4間以上の桁行きをもつ可能性もある。P1は110×116cmの隅丸方形で深さ22.5cm、P2は96×110cmの隅丸方形で深さ17.3cmである。覆土はローム粒・ロームブロックを多く含む暗褐色土で第1地点検出の柱穴と類似する。トレンチ内北寄り中央部分にも方形で平面形状の類似した土坑（SK03）が検出されているものの、その覆土は灰褐色土であり、近世以降の新しい時期の穴とみられる。

SI02は平面形状や主軸方位は判別できない。トレンチ北壁に沿ってサブトレンチ状に掘り下げたところ、幅28～34cm、深さ4cm前後の壁周溝と、床面とみられる硬化面を検出した。床面標高は21.58mである。第5図1のハケメ調整の土師器片が出土したことから、古墳時代前期の所産とする。



3トレ
1 現代盛土層
2 暗褐　ローム粒多い
3 暗褐　２層よりローム粒少なめ
4 黒褐　ロームブロック含む
5 暗褐　ローム小ブロック少量かつ均一に含む
6 黒褐　ローム小ブロック少量
7 暗褐　やや黄色味強い
8 黒褐　ローム粒少量
9 暗褐　ロームをまだらに含む
10 暗褐＋ソフトローム　ローム漸移層
11 黒褐　ロームブロック含む　しまり弱い
12 暗褐　ロームをまだらに含む
13 ソフトローム

第6図　3トレンチ実測図・出土遺物

SI03は方形のプランが想定され、トレンチ南壁に沿ってサブトレンチを設定し掘り下げた。北西壁にカマドとみられる燃焼面を有する。ただ、覆土や土層観察によって白色粘土の散布が認められないことから、カマドと断定はできない。硬化面はみられず、P1及びP2を検出した。P1は深さ22.4cm、P2は39.0cmである。P2の底面は箱形となっており、貯蔵穴などの用途が考えられる。確認面付近や覆土中から弥生土器、土師器などが出土しており、明確な時期は判断できないが、燃焼面がカマドであると仮定し、奈良・平安時代の所産としておく。

SI04はほんのわずかに壁際を検出したのみであるが、白色粘土粒を含む覆土や壁の向き、床面掘り形のレベルが近いことなどから、第1地点の002竪穴建物跡と同一の竪穴である可能性をもつ。推定復元では4.0×4.0mの方形となる。出土遺物はないが、第1地点002と同一の竪穴であれば、奈良・平安時代の所産であろう。

3トレンチでは東壁に燃焼面の一部が、南壁付近に硬化面がみられた。燃焼面を炉と仮定し、北側の壁との関連性から、SI01を弥生時代後期の竪穴建物跡と想定した。SK01は深さ59.5cmを測り、底面に柱あたりとみられる部分が確認された。SK01から西南西方向に、幅28～58cm、深さ11cm前後の溝が延びるが、関連性は不明である。トレンチ南西角には深さ34.1cmの方形の土坑（SK02）を検出した。溝状遺構及び土坑の覆土上層からは、弥生土器や土師器が出土している。また、SK01及び溝跡の南側に硬化面を検出したが、SI01の硬化面であるかどうか判断できず、他の竪穴建物跡のプランは確認できない。これらの状況から、時期の異なる2軒の竪穴建物跡が重複していることなどが想定されるものの、土層観察などからは確認できなかった。

3　郡本遺跡群（第13次）（遺構：図版2・3／出土遺物：図版6・7・8・9）

遺跡の位置と周辺の調査状況　遺跡は、東京湾の旧海岸線から南東に約2.5km内陸で、標高25mほどの通称「市原台地」上にある。南北1.35km、東西0.83kmの広大なエリアを指し示すため、「遺跡群」と呼称する。上総国分寺跡や尼寺跡は、調査区から小支谷を挟んで南に1.2kmほど離れている。

郡本遺跡群は、上総国府推定地として７回の学術調査が実施されている（うち１回は地中レーダー探査）ほか、個人住宅の建築や建替えなどに先立ち、小規模な調査が断続的に行われている。国府推定地確認調査は、主に郡本交差点の北東エリアの字「古甲」地域を中心に実施し、「古甲遺跡〇次」と呼称した。6次調査は市原郡衙推定地としても有力候補であった郡本八幡神社の境内地の本殿東側部分で実施したが、弥生時代及び奈良・平安時代の集落跡を確認したのみであった。

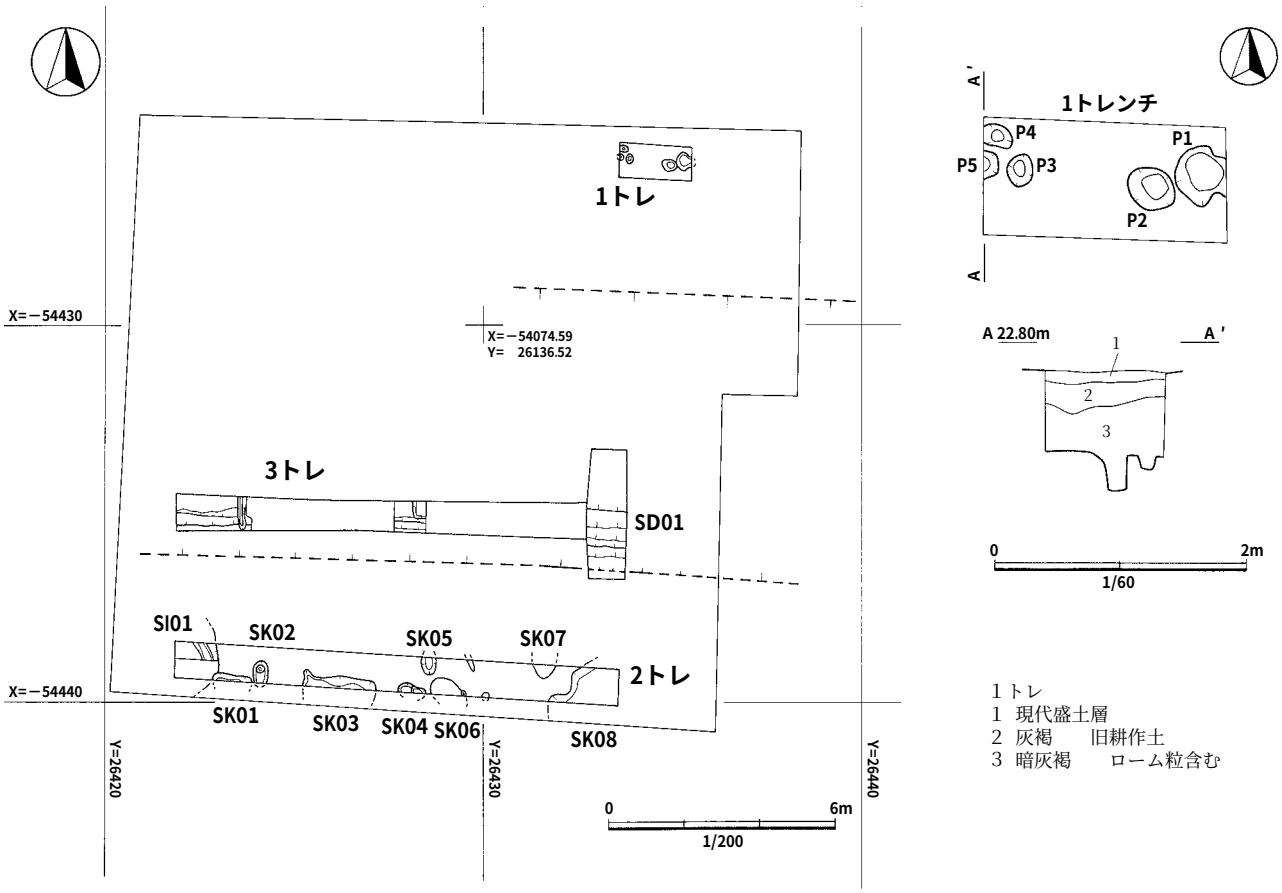
民間開発などの緊急調査には「郡本遺跡群第〇次」と呼称しており、現在は14次まで調査している。他に、ふるさと文化課が八幡神社北側の集会所部分を調査し、弥生時代の竪穴建物跡などを検出しているが、調査コードや名称はついていない。

これらの調査の結果、弥生時代中期から中世にかけての遺構が検出されているが、国府や郡衙を決定的に裏付ける遺構や遺物はいまだ検出されていない。ただ、掘立柱建物や大規模な溝跡、緑釉陶器や特殊な墨書土器などは、通常の集落遺跡のみではないことを想定させる。また、今年度の12次調査では、11次調査で確認した大型遺構の一部本調査を実施し、台地成形を伴う中世の墓域であるこ

（市原市基本図1／2500、昭和55年測図より）

0　200m
（1／5,000）

第7図　郡本遺跡群周辺地形図



第8図 郡本遺跡群（第13次）全体図・1トレンチ実測図

とが判明した。また、近接して井戸跡なども検出している。

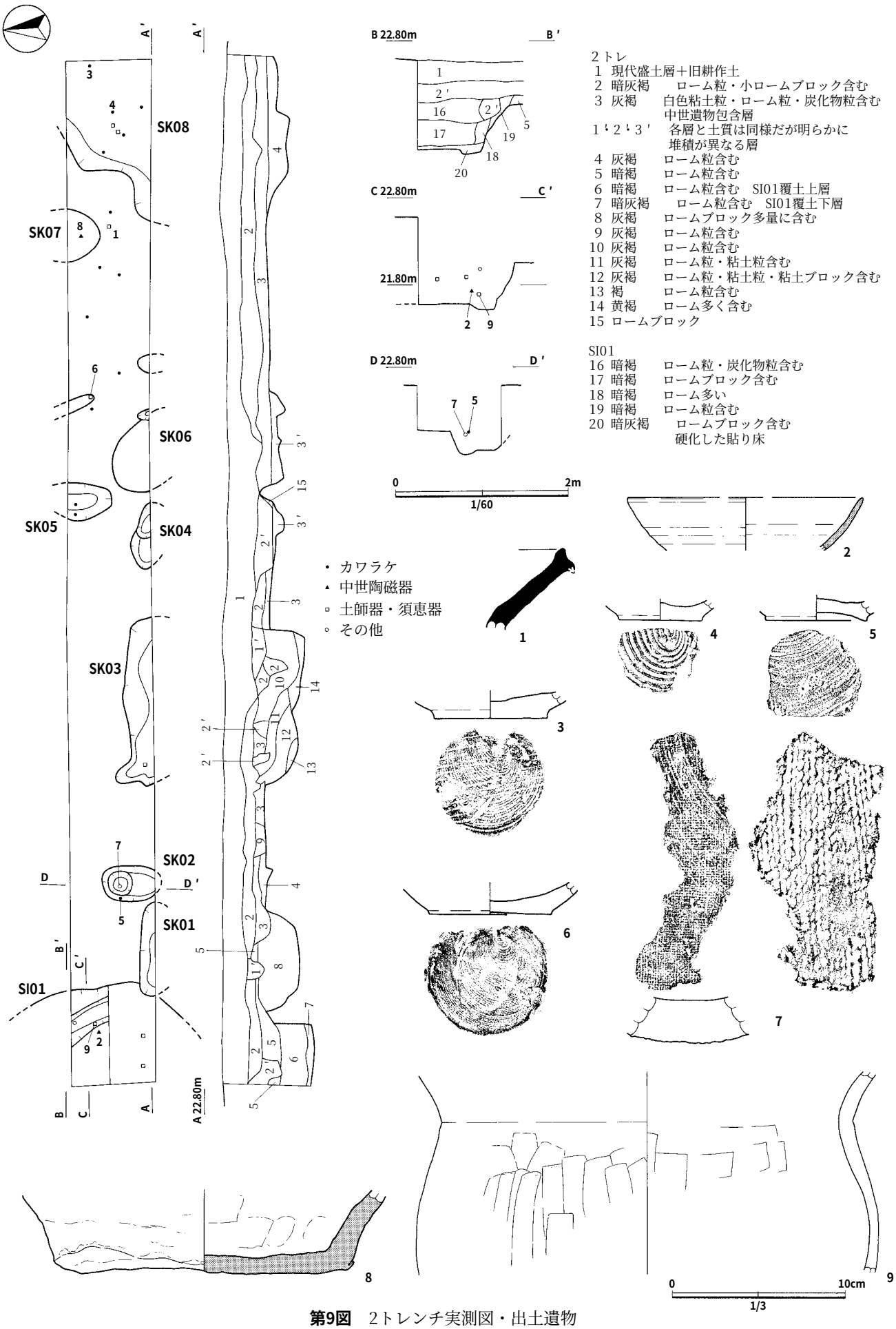
今回調査区は、郡本八幡神社の境内から50mほど西の参道からやや北に入った畑地である。調査区の標高は22.6m前後である。北側隣接地では、平成10年度の5次調査において弥生時代中期～後期の竪穴建物跡3軒、奈良・平安時代の竪穴建物跡2軒のほか、東西に走る溝跡1条を検出しており、今回調査の溝跡との関連性が注目される（北見一弘 1999「郡本遺跡（第5次）」『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会）。また、国道297号線及び県道五井・本納線の工事に伴う小規模の調査を県センターが実施しており、郡本5次調査での溝と同一遺構とみられる溝跡（以後「SD001」と記述）を確認している。（相京邦彦・伊藤智樹 2004「一般国道297号交通安全施設等整備委託(埋蔵文化財)報告書－市原市郡本遺跡－」財団法人千葉県文化財センター調査報告第491集）

調査概要 調査は個人住宅建設に先立ち実施された。確認トレンチは母屋基礎部分を除ける形で設定し、庭部分に偏った配置となった。遺構名は整理作業時に変更した。1トレンチは浄化槽部分であり、本調査とした。中世とみられるピット5基を検出した。2トレンチでは、中世の竪穴状遺構（SI01）1基のほか、ピットや土坑（SK01～08）など10基を確認した。

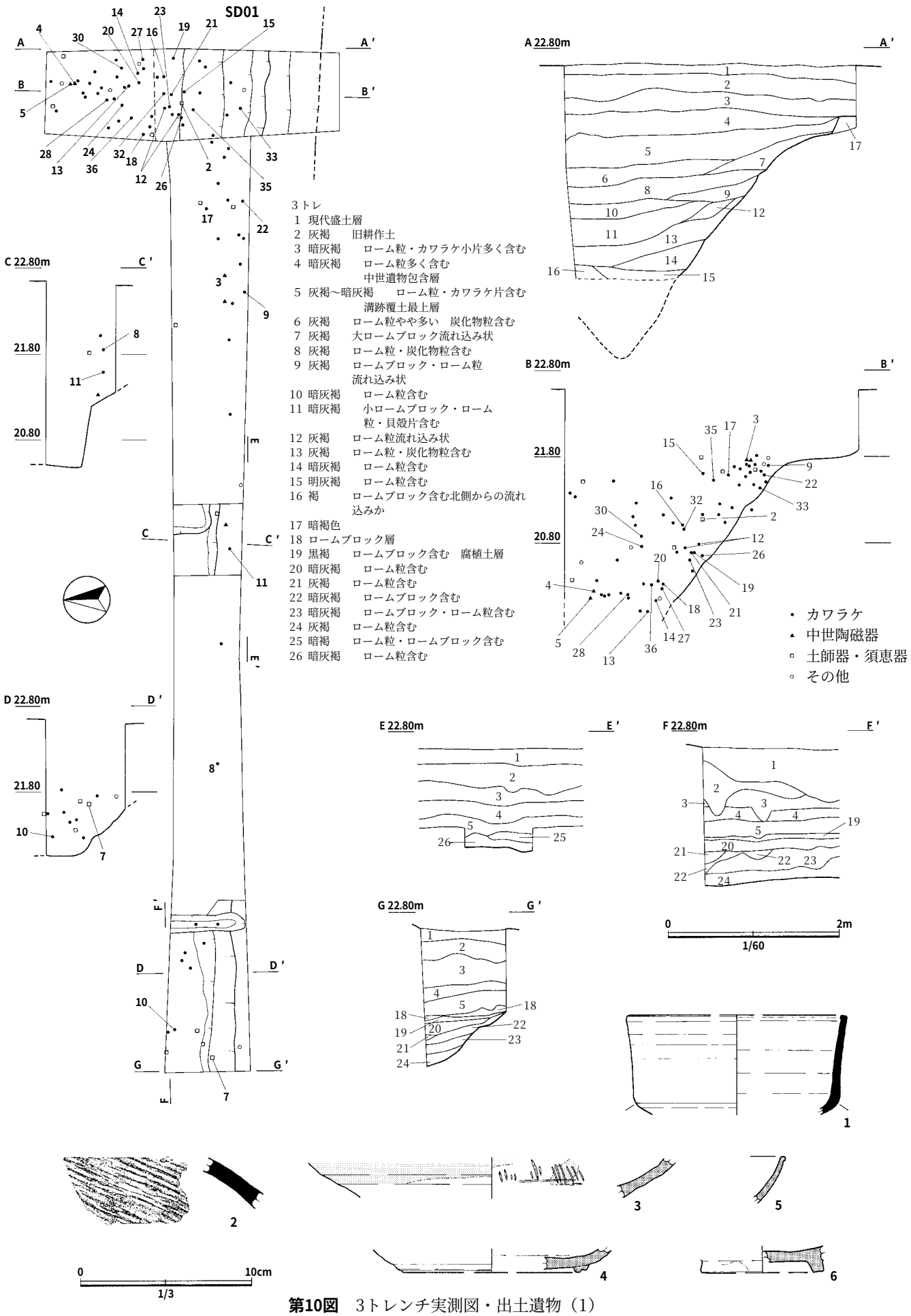
3トレンチでは、推定上面幅7.5m、遺構確認面から推定2.8m程度の深さを有する断面V字状の大型の溝跡（SD01）を確認した。溝跡の覆土には13世紀後半をピークとしたカワラケを多量に含んでいる。平成22年2月15日現在調査中の14次調査は、今回調査区の東側隣接地であり、この溝跡の東方向の延長上を調査している。来年度の本書で報告予定である。

なお、出土したカワラケは上総国分僧寺跡の土器編年に基づき分類し、時期を想定した。（櫻井敦史 2009「第6節 10世紀末以降における土器変遷」『上総国分僧寺跡Ⅰ』市原市教育委員会）

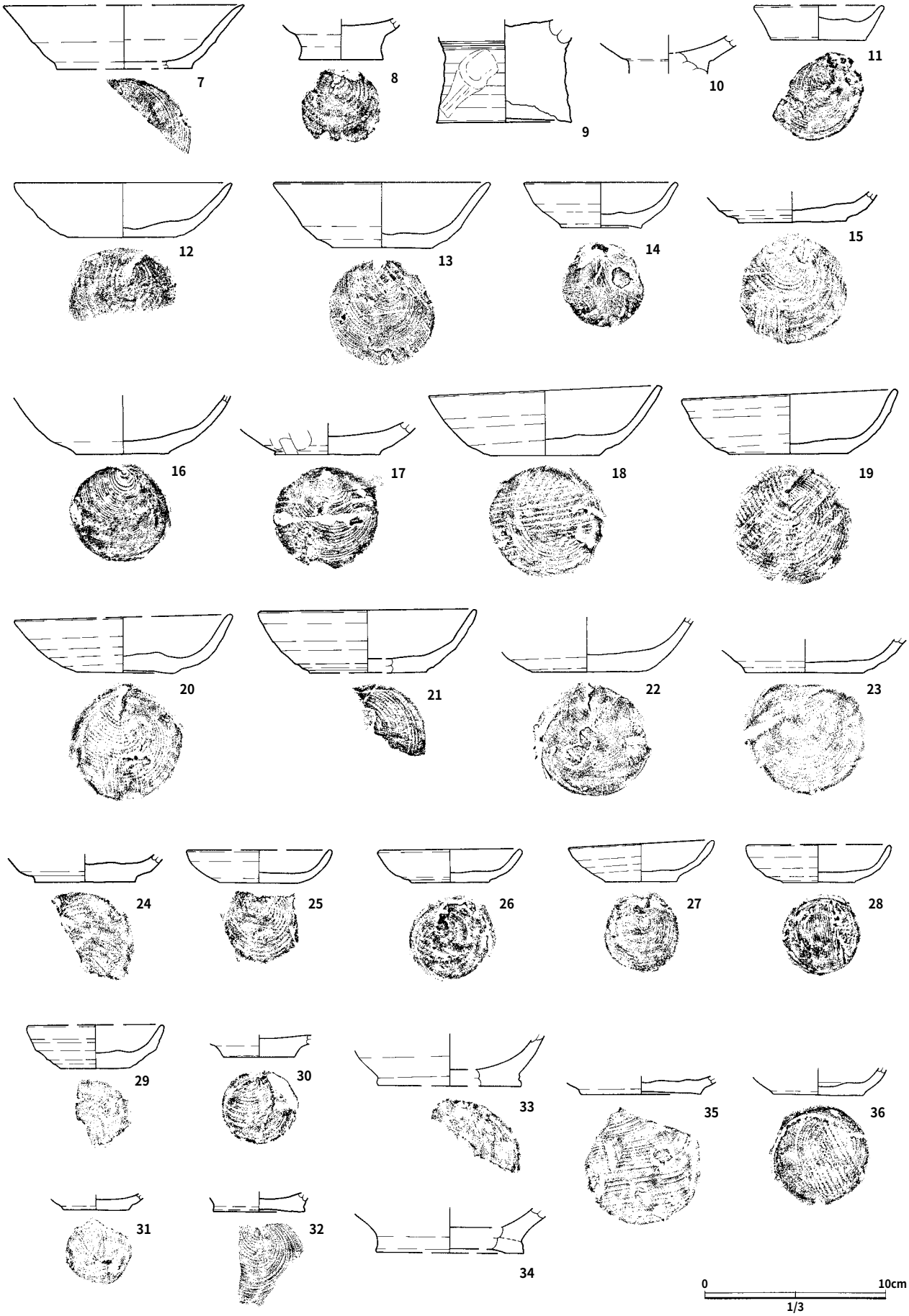
遺構と遺物 1トレンチではピット5基を検出した。各ピットの深さはP1 44.7cm・P2 44.8cm・P3



第9図　2トレンチ実測図・出土遺物



第10図 3トレンチ実測図・出土遺物（1）



第11図　3トレンチ出土遺物（2）

15.5cm・P4 11.3cm・P5 30.8cmである。ピットの時期を明確にする遺物は出土していないが、耕作土直下からピットまでローム粒を含む暗灰褐色土が堆積している。トレンチ一括遺物のなかには13世紀代とみられるカワラケ小片4点22.0gも含まれている。大規模に造成された前述のSD001と今回調査のSD01との間のエリアにあたり、その時期のなんらかの造成痕跡があるとみた方が自然かもしれない。5次調査においても、多数のピット群が検出されている。

2トレンチはSD01よりも南側に位置する。SI01はトレンチ西端にかかる状態で確認された。確認面からの深さは51.5cmであり、幅18～20cm、深さ5cm程度の壁周溝をもつ竪穴建物跡とみられる。床面の一部には硬化面がみられる。第9図2の椀と9の土師器甕が出土しているが、2の椀型陶器は、産地や時期が判別できなかった。胎土は明灰色で堅緻ではなく、緑釉陶器の素地に似ているようでもある。3トレ出土の第10図4と類似するが、復元径が異なる。また、SI01覆土中より13世紀代とみられるカワラケ小片2点29.1gを検出している。

他に、2トレンチでは不整形の土坑及びピットを確認した。SK02は深さ28.0cmであり、覆土上層から第9図7の布目瓦と5の静止糸切り後無調整のカワラケ杯が出土している。また、SK07の確認面付近では8の常滑産陶器の甕が、SK08では3・4のカワラケが出土している。2トレ出土でカワラケと確認できた破片は、200点728.5gである。時期を判断できそうなものの中で目立つのは13世紀後半の杯と小皿であり、白カワラケも8点64.2gが含まれる。各土坑の深さは、SK01が36.3cm、SK03は40.8cm、SK04は15.2cm、SK05は25.2cm、SK06・07は掘り下げておらず、SK08は17.3cmである。なお、SK08は地形的な窪みの可能性もある。

3トレンチは、結果としてほぼ全体が東西に走るSD01の範囲内に入った状態である。トレンチ東端を南北に拡張する形で溝幅の確認を試みたが、南の掘り込み部分は捉えられたものの、北側肩部分にはまったく及ばない状態であり、想定外の大規模であることが判明した。

SD01は最大検出長11.9mであり、軸はN-87°-Wと推定される。サブトレンチなどで確認できた部分が溝の規模に対してあまりに小さい範囲であるが、東側隣接地の14次調査では、北側と南側の溝の両肩ラインを確認できており、その方向や幅と合わせて検討したものである。第8図全体図の北側推定ラインについても、14次調査の成果に基づいている。

溝跡の確認面での上面幅は7.5m前後と想定される。ボーリングステッキ調査によれば、3トレンチで検出した溝跡の確認面からの最大深度は3.8mと推定され、底面付近の断面形状はV字型を呈しているとみられる。したがって、底面まで掘ることは安全面からも工程的にも難しく、断念した。

覆土出土遺物にはカワラケが多数含まれており、3トレンチ全体の総量は635点（7,630.7g）に及ぶ。古い部分では11世紀後半から12世紀後半にかけての僧寺Ⅹ～Ⅺ期がみられ、53点（795g）である。なかでも僧寺Ⅻ期（13世紀後半期）とされるカワラケが342点（3,518.0g）であり、約半数を占める。13世紀前半期の僧寺Ⅻ期も含めると点数で7割以上、総重量で約6割となりこの時期にピークがあるとみられる。14世紀代の僧寺ⅩⅣ期になると激減し、6点（235.4g）を認めるにすぎない。覆土の下層から上層まで13世紀代の遺物を含んでいるが、土層断面からは、人為的に急速に埋め戻した状態ではなく、ある程度自然の堆積によって埋没したことが観察される。硬化面などは認められない。この溝跡は、西方60mの3次調査や8次調査では検出されていない。東に30mで郡本八幡神社境内地である。大規模ではあるものの、ただ東西に延びる溝跡ではないことが予想される。

郡本遺跡群（第13次）中世遺物集計表　　調査面積：26.5㎡（確認調査）

産地	器種	型式	時期	点数	重量（g）
白磁	-	-	-	1	1.3
白磁	椀	-	12c	1	3.8
白磁	椀	-	12 ～ 13c	2	26.9
渥美	甕	-	-	2	42.5
常滑	甕	-	-	4	661.9
瀬戸・美濃	天目茶椀	古瀬戸中期	鎌倉末～南北朝	1	4.7
瀬戸・美濃	卸目付大皿	後Ⅲ	15c 前葉	1	18.3
瀬戸・美濃	深皿・盤類	後Ⅰ～Ⅲ	14c 後葉～ 15c 前葉	1	15.7
東海	伊勢型鍋	-	12 ～ 13c	1	2.9
在地か	白カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	43	387.0
在地か	白カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	39	157.1
在地か	白カワラケ（小皿）	-	-	1	1.4
在地か	白カワラケ	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	71	340.8
在地か	柱状高台土器（白色）	-	僧寺 XIII 期	1	33.6
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ	僧寺 XIII 期	1	6.1
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -1	僧寺 XI 期	3	38.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -1	僧寺 XIII 期	5	53.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -1	僧寺 XIV 期	3	167.7
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -1	僧寺 XIII ～ XIV 期か	1	117.2
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 X 期	5	94.0
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XI 期	6	77.0
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XII 期	2	38.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XII 後～ XIII 前期	1	11.3
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 前期	2	18.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	33	645.8
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -3	僧寺 XI 期	3	59.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -3	僧寺 XII 期	17	182.3
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -3	僧寺 XIII 期	21	367.1
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -3	僧寺 XIII 後～ XIV 前期	1	26.2
在地	カワラケ（杯）	Ⅲ -3	僧寺 XIV 期	1	35.9
在地	カワラケ（杯）	Ⅳ	僧寺 XIII 後～ XIV 前期	3	268.7
在地	カワラケ（杯）	Ⅳ -2	僧寺 XII 期	1	13.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅳ -2	僧寺 XIII 期	3	154.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅳ -2	僧寺 XIII 後～ XIV 前期	3	216.0
在地	カワラケ（杯）	Ⅴ	僧寺 XIII 期	3	48.7
在地	カワラケ（杯）	Ⅵ	僧寺 XII 後期	1	20.1
在地	カワラケ（杯）	Ⅵ	僧寺 XIII 期	6	85.1
在地	カワラケ（杯）	Ⅵ	僧寺 XIII ～ XIV	1	10.4
在地	カワラケ（杯）	Ⅵ	僧寺 XIV 前期	1	25.3
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 X 期	2	40.3
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 X 末～ XI 前期	2	48.2
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 XI 期	11	171.0
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 XII 期	9	169.5
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 XII ～ XIII 期	26	487.1
在地	カワラケ（杯）	-	僧寺 XIII 期	12	256.9
在地	カワラケ（杯）	-	-	26	217.6

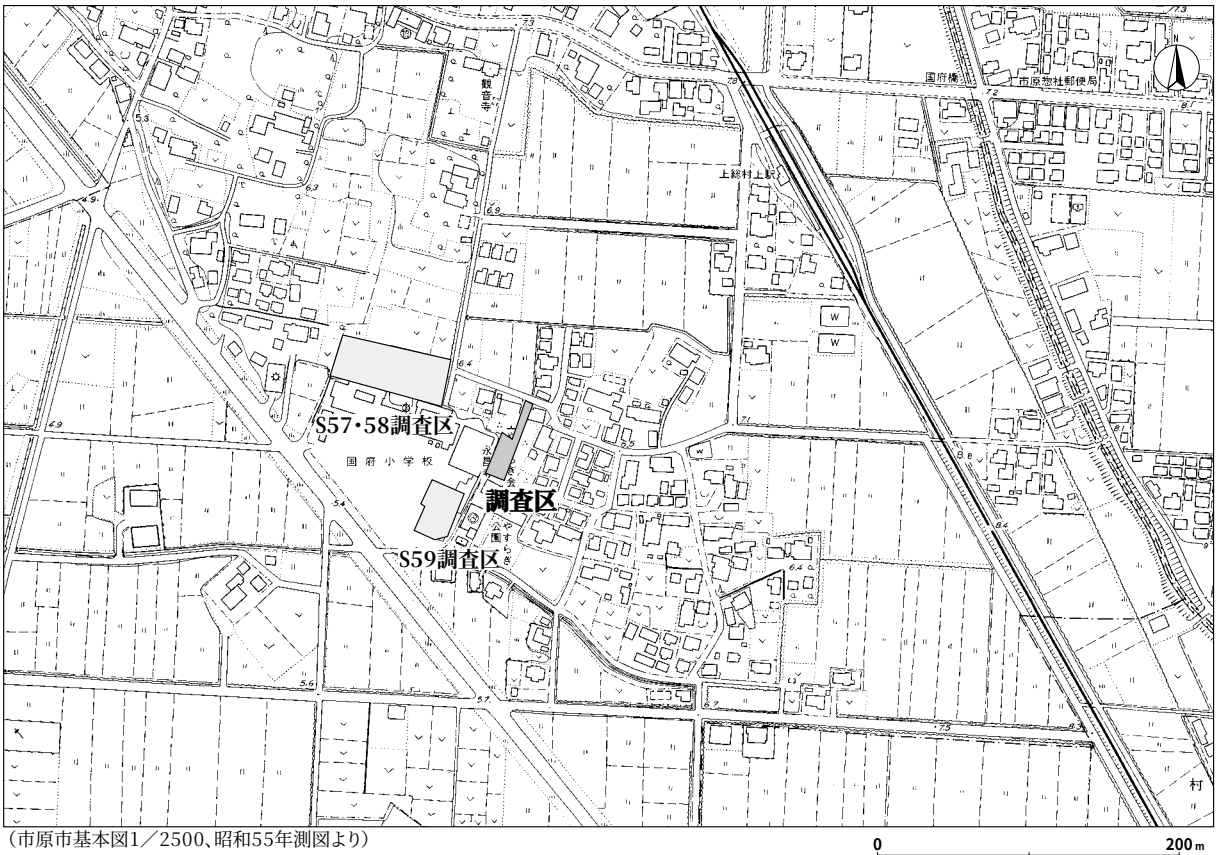
産地	器種	型式	時期	点数	重量（g）
在地	カワラケ（小皿）	Ⅱ -1	僧寺 XI 期	2	61.5
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ	僧寺 XII 期	1	1.2
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ	僧寺 XII ～ XIII 期	1	4.9
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ	僧寺 XIII 期	1	1.9
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ	-	1	2.8
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -1	僧寺 XI 期	2	15.1
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -1	僧寺 XIII 期	5	75.7
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -1	僧寺 XIII ～ XIV 期か	1	55.6
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 X 末～ XI 前期	5	64.4
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XI 期	5	49.0
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XII 期	5	65.0
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XII ～ XIII 期	3	15.4
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 前期	11	88.1
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	37	283.4
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -3	僧寺 X 末～ XI 前期	1	8.6
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -3	僧寺 XI 期	1	27.5
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -3	僧寺 XII 期	14	121.1
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -3	僧寺 XII ～ XIII 期	4	10.5
在地	カワラケ（小皿）	Ⅲ -3	僧寺 XIII 期	4	55.1
在地	カワラケ（小皿）	Ⅵ	僧寺 XIII 後～ XIV 前期	1	4.7
在地	カワラケ（小皿）	Ⅵ	僧寺 XIV 前期	1	6.5
在地	カワラケ（小皿）	Ⅴ	僧寺 XIII 期	8	77.4
在地	カワラケ（小皿）	-	僧寺 X 期	1	23.9
在地	カワラケ（小皿）	-	僧寺 XII 期	2	18.4
在地	カワラケ（小皿）	-	僧寺 XII ～ XIII 期	11	166.0
在地	カワラケ（小皿）	-	僧寺 XII 後～ XIII 前期	1	7.9
在地	カワラケ（小皿）	-	僧寺 XIII 期	10	109.2
在地	カワラケ（小皿）	-	-	26	95.5
在地	カワラケ	Ⅲ -1	僧寺 XI 期	1	13.5
在地	カワラケ	Ⅲ -1	僧寺 XIII 期	6	54.1
在地	カワラケ	Ⅲ -2	僧寺 XI 期	3	31.2
在地	カワラケ	Ⅲ -2	僧寺 XIII 前期	4	26.1
在地	カワラケ	Ⅲ -2	僧寺 XIII 期	16	182.0
在地	カワラケ	Ⅲ -3	僧寺 XI 期	5	50.0
在地	カワラケ	Ⅲ -3	僧寺 XII 期	14	105.7
在地	カワラケ	Ⅵ	僧寺 XIII 期	3	14.0
在地	カワラケ	-	僧寺 X 期	1	11.4
在地	カワラケ	-	僧寺 X 末～ XI 前期	1	9.8
在地	カワラケ	-	僧寺 XI 期	4	33.5
在地	カワラケ	-	僧寺 XII 期	6	52.3
在地	カワラケ	-	僧寺 XII ～ XIII 期	47	417.1
在地	カワラケ	-	僧寺 XIII 期	18	186.1
在地	カワラケ	-	-	46	287.3
在地	柱状高台土器	-	僧寺 XIII 期か	1	56.6
在地	柱状高台土器	-	僧寺 XII ～ XIII 期	1	254.7
在地	高杯	-	11 ～ 12c	1	32.3
計				727	9,203.2

4　村上遺跡群門前地区（遺構：図版3／出土遺物：図版10）

遺跡の位置　今回調査区は、養老川下流域右岸の標高7m前後の微高地にあり、養老川の現流路まで南及び南西に900mである。しかし、かつて養老川は複雑な蛇行を繰り返しており、調査区から南西に50m付近まで旧河道が迫っている。この付近の微高地上は、村上遺跡群と村上城跡の範囲に入っている。かつて村上遺跡群は、国府の方八町の方格地割を有することが可能な候補地として考えられてきた経緯がある。しかし近年は、各施設が分散した広域の国府域を想定する傾向にあるため、国府関連施設の水運部分を担うエリアであった可能性を有するに留まる。周辺には「堀之内」「馬場台」「後口」など、城跡の存在を想起させる字名が並ぶ。一方、「門前」「寺中」「大門」など寺院に関連する字もみられる。調査区南側隣接地には永昌寺があり、近世石塔類が多くみられる。

付近の調査事例としては、今回調査区の西側隣接地である国府小学校の改築工事にあたり、校舎及びプール部分の調査を実施している。想定された中世城郭的な様相はみられず、昭和59年調査区において16世紀以降の陶磁器や石塔類などの遺物が出土し、堀や土塁などとあわせて、大規模な寺院跡の存在を示唆している。（山口直樹・田所真 1986『村上城跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第11集）

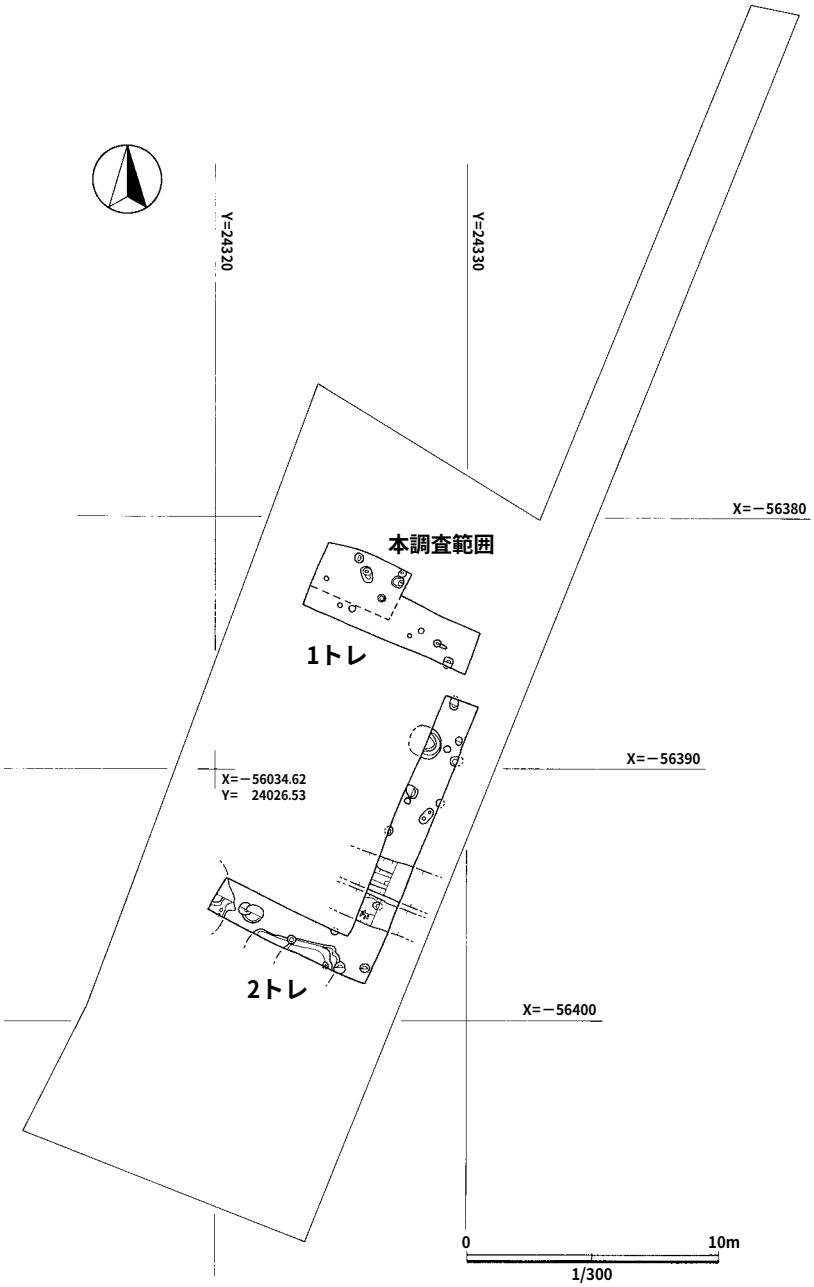
また、東関東自動車道館山線の建設にあたって、市原インターチェンジ部分や道路用地部分を135,500㎡にわたって調査し、村上地区の本調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物群65棟を検出している（小久貫隆史・渡邊高弘 1997『村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書』財団法人千葉県文化財センター調査報告第309集）。報告によれば、明確な区画や官衙的な遺物はなく建物規模も小さいが、竪穴建物跡は確認できないことなどから、生活の場ではなく、水運を利用した津の可能性が高いことを指摘している。



（市原市基本図1／2500、昭和55年測図より）

0　200m
（1／5,000）

第12図　村上遺跡群周辺地形図



第13図　村上遺跡群門前地区全体図

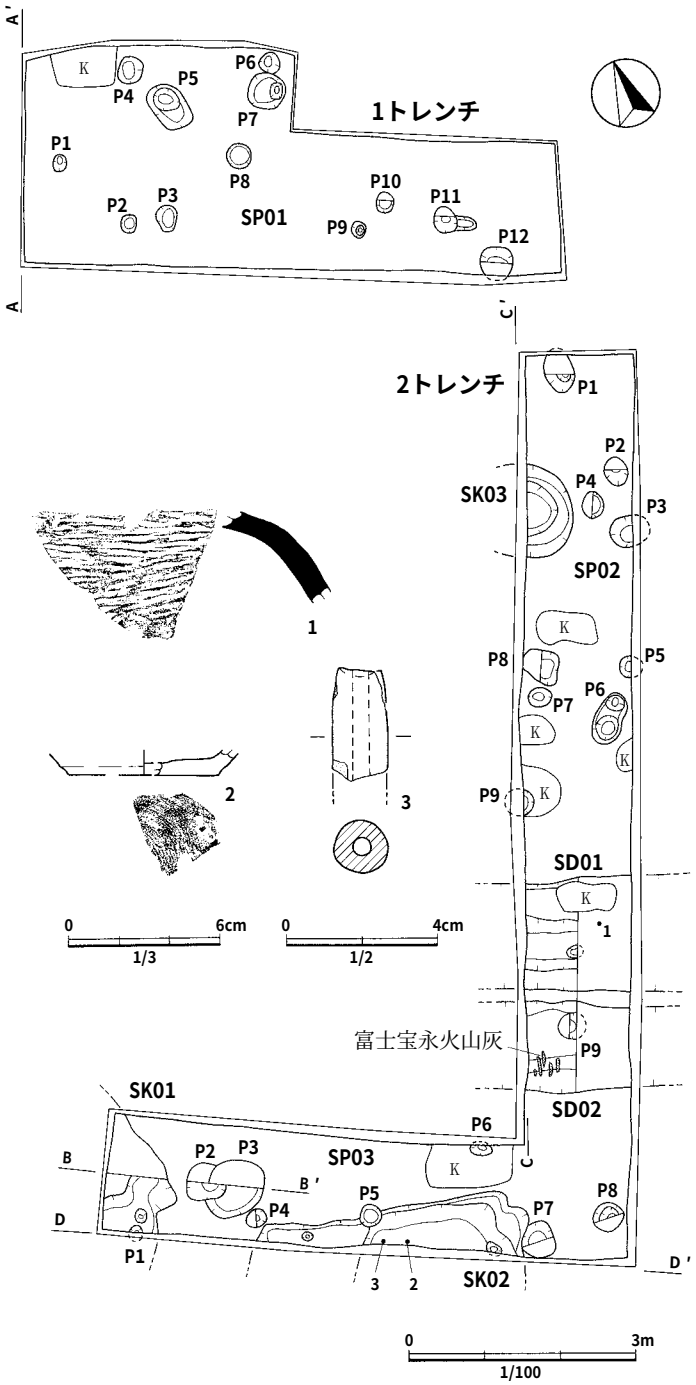
調査概要　個人住宅建設に先立つ確認調査であり、母屋基礎部分を避けトレンチを設定した。1トレンチの一部は浄化槽にあたるため本調査とした。現地表面の標高は6.9～7.1mである。現地表から40cm前後下層において黄白色粘土層の堆積を確認し、その上面を遺構確認面とした。1トレンチではピット12基、2トレンチでは土坑3基・ピット18基・溝跡2条を確認した。出土遺物は全体的に少なく、いずれも明確な時期を示す遺物をみないが、カワラケとみられる土師質の小型器種の小片が散見されることから、中世～近世と推定される。

遺構と遺物　1トレンチと2トレンチのピット群を分布のまとまりで便宜上3群に分け、SP01～03と呼称する。

各遺構（第14図参照）の覆土観察では、以下の4種類に分けられる。

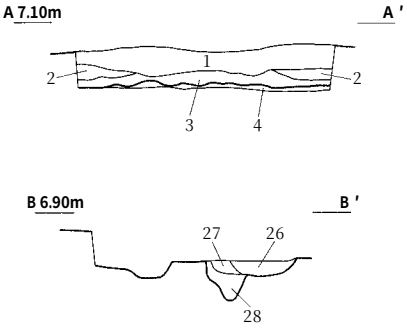
A：黒褐色粘土に白色粘土ブロックが混ざる＝1トレSP01、2トレSP02-P1、SP03-P1・P2・P4・P5
B：暗灰褐色土に白色粘土ブロックと炭化物・橙色粒を含む覆土＝2トレSP02-P2～7
C：Bより白色粘土を含む割合が増えたもの＝2トレSP03-P3・P6～9、SK02、SD01
D：灰色土に白色粘土ブロックが多量に含まれる覆土＝2トレSK03・SP02-P8・P9、SD02

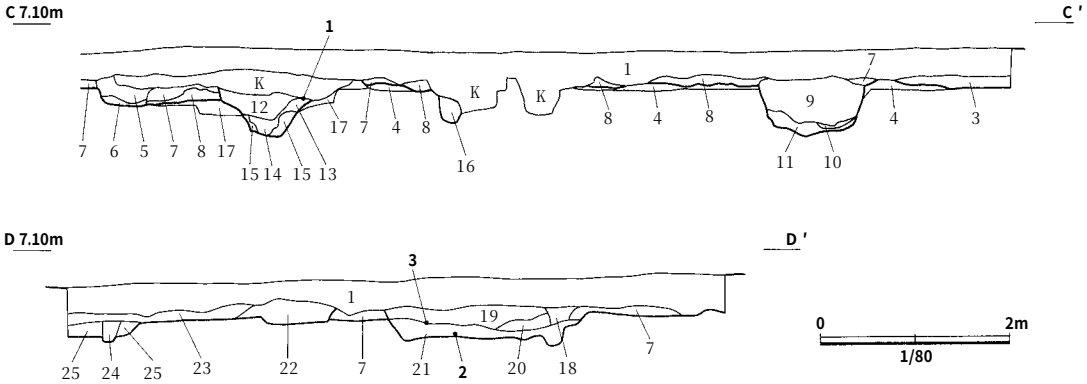
Dは近世的な灰色系の土であり、SD02の底面の農工具痕に入り込んだ富士宝永火山灰（1707年降灰）が確認されたことからも、近世18世紀以降とみられる。A・B・Cは中世的な橙色粒を含む黒～暗褐色土が主体であり、Dより以前のものであると経験的に考えられる。ただ、SD02はSD01と並行して掘られており、この軸向きを偶然ではないと考えると、C系覆土のSD01もまた、中世まで遡るとは断定できない。また、SP03のP2とP3は重複しており、A系覆土のP2をC系覆土のP3が切っている。覆土の類似がある程度時期差を示していると仮定し、これら遺構の変遷を推定するならば、A→B・C→Dとなろう。遺構としての配置や性格は、今回の調査では判然としない。



1トレ・2トレ共通
1　灰褐色　　現表土　耕作の影響多い　しまり強い
2　灰褐色粘土　　橙色粒(～8mm)少量　しまり強い　粘性強
3　暗褐色粘土　　橙色粒(～5mm)少量　しまり強い　粘性強
4　黄灰色粘土　　地山粘土　鉄分が錆状になる　遺構確認面

2トレ
5　灰色砂　　錆・橙色粒(～3mm)少量　SD02覆土上層
6　灰色砂　　錆・橙色粒(～3mm)少量　白色粘土混ざる
下面に富士宝永火山灰あり　SD02覆土下層
7　灰～暗灰砂＋白色粘土(40%)マーブル状（水流の影響か）
に混ざる
8　灰～暗灰砂＋白色粘土(10%)マーブル状に混ざる
9　暗褐色粘土＋白色粘土ブロック(～30mm)多量　橙色粒(～
5mm)・黒色粒(～3mm)少量　SK03覆土　一気に
埋まった状態
10　灰色砂
11　暗褐色粘土＋白色粘土ブロック(～50mm)多量
12　暗褐～黒褐色粘土　　橙色粒(～5mm)多い　白色粘土ブ
ロック(～10mm)少量　SD01覆土上層
13　暗灰砂＋白色粘土(40%)混ざる
14　暗褐～黒褐色粘土　　白色粘土マーブル状に混ざる
SD01覆土下層
15　暗灰砂＋黒灰粘土ブロック(～15mm)まばら
白色粘土混ざる(30%)
16　9層と類似　　やや暗色　SP02-P9覆土　SK03と同時期の
ピットか
17　灰～暗灰砂　　白色粘土・暗灰色粘土ブロック(～10mm)
少量混ざる地山粘土の下層
18　暗灰褐色粘土　　炭化物粒(～10mm)
19　暗灰褐色粘土　　炭化物粒(～8mm)・橙色粒(～5mm)
少量
20　19層＋白色粘土混ざる
21　暗灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～30mm)多い　灰
色砂混ざるSK02覆土下層
22　暗灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～8mm)まばら　炭化
物粒(～5mm)・橙色粒(～3mm)少量
23　暗灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～30mm)多い
24　黒灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～20mm)多い
SP03-P1覆土
25　灰色砂＋白色粘土混ざる　暗灰色粘土ブロック少量
26　暗灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～10mm)まばら
橙色粒(～3mm)少量
27　暗灰褐色粘土　　白色粘土ブロック(～20mm)多量
橙色粒(～3mm)少量
28　黒褐色粘土　　白色粘土ブロック(～10mm)まばら
SP03-P2覆土下層





ピット深さ一覧

P番号	深さ(cm)
SP01-1	4.7
2	21.5
3	31.8
4	23.2
5	60.8
6	13.0
7	34.8
8	21.8
9	31.7
10	26.6
11	44.7
12	42.3
SP02-1	12.3
2	53.7
3	69.8
4	5.2
5	15.4
6	57.5
7	41.0
8	21.1
9	36.5
SP03-1	24.5
2	43.6
3	18.2
4	24.0
5	14.2
6	42.1
7	27.1
8	23.9
9	47.6

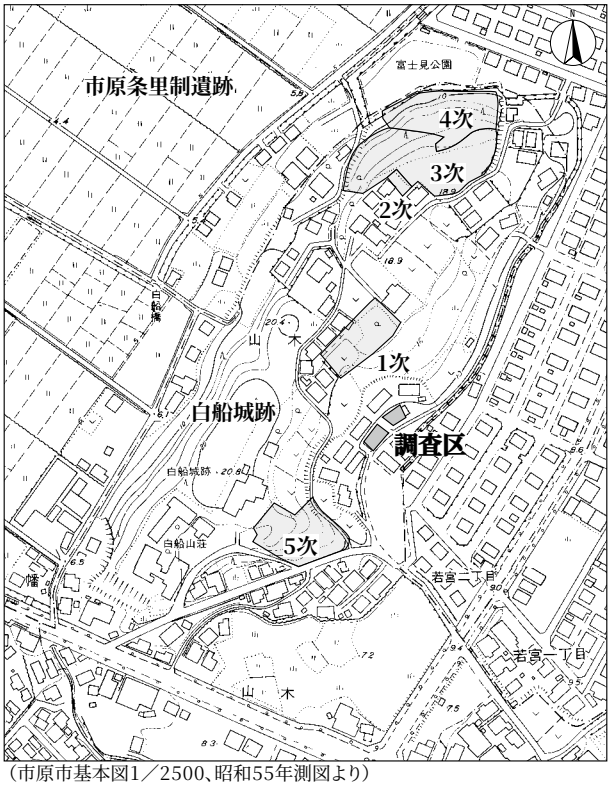
第14図　1・2トレンチ実測図・出土遺物

5　白船城跡（第6次）（遺構：図版4／出土遺物：図版7・10）

遺跡の位置と歴史的環境　白船城跡は、東京湾の旧海岸線、八幡浦から南東に2.0kmに位置する長さ430m、最大幅150mの独立台地上にある。北西には市原条里制遺跡がひろがる。小支谷を隔てた南側には市原城跡や光善寺廃寺、市原八幡神社などを包括し、国府推定地のひとつでもある郡本遺跡群がある。また、南南東1.0km付近には戦国期の能満城跡を含む能満遺跡群があり、その一角の府中日吉神社の現存本殿は、飯香岡八幡宮本殿と同時期の15世紀中頃の建立とみられている。

白船城跡は、細長い台地上を3本の堀で分割することで4つの曲輪をつくる、直線的な連郭式の城郭とみられている。これまでの1次調査と2・3次調査は曲輪部分において実施されている。1次調査では弥生時代と平安時代の竪穴建物跡を調査し、中近世とみられる多数のピット跡や地下式坑、台地整形とみられる痕跡などを検出している（髙橋康男 1987『白船城跡－第1次－』財団法人市原市文化財センター調査報告書第15集）。2・3次調査でも墓域や城郭関連とみられる土坑・ピット群を検出し、15世紀後半から16世紀にかけての陶磁器やカワラケ類が多く出土している。（櫻井敦史 1997『白船城跡Ⅱ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第35集）報告によれば、墓域の形成後、それを取り込む形で城郭の普請が行われており、築城主体と被葬者の繋がりを想定している。

調査概要　宅地造成に先立ち確認調査を実施し、浄化槽設置部分の2・5トレンチ部分は本調査とした。調査区内は近年の盛土造成がなされており、北西側の城郭斜面側が削平され、南東側も道路の造成時に削平されたとみられる。現地表面の標高は平坦面で10m前後、南東端切り土下の道路沿い付近で9m前後である。各トレンチに暗褐色土が厚く堆積しており、これが自然の堆積ではなく、平坦面をつくるための盛土造成の結果であると判断した。したがって、調査区全体が、白船城跡の東裾部

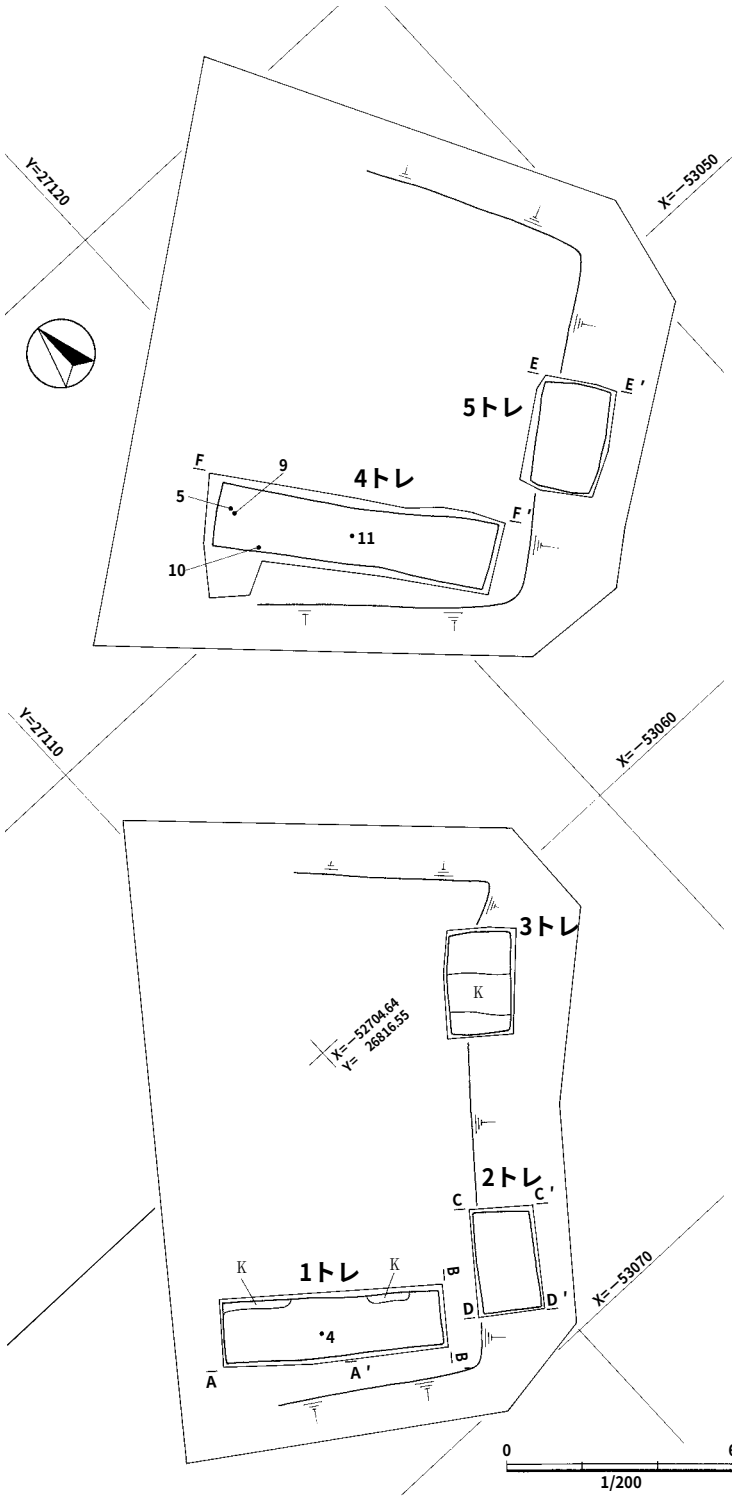


（市原市基本図1／2500、昭和55年測図より）

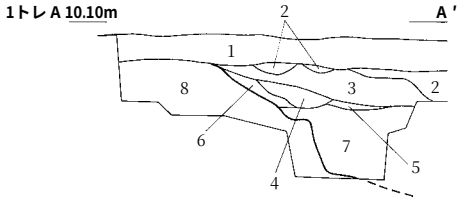
（昭和36年撮影）

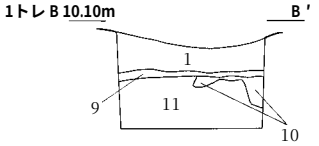
0　200m
（1／5,000）

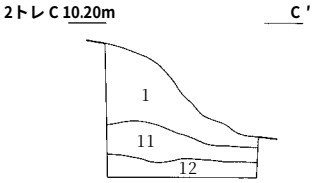
第15図　白船城跡周辺地形図

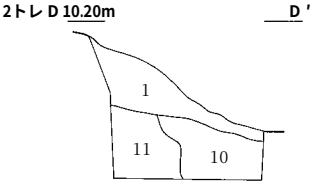


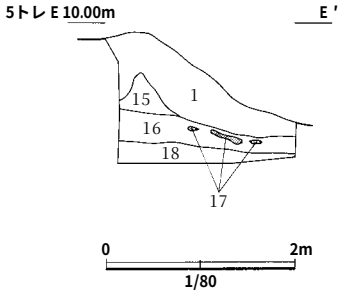
各トレンチ
1 造成盛土
2 暗褐　ローム粒多い
3 暗褐　2層より黒色味強い　白色微粒子多い　ローム粒含む
4 暗褐　3層より褐色味強い　混ざりほとんどなし
5 暗褐　黒褐色土を斑状に含む
6 灰褐色粘性土
7 黒褐色　炭化物粒少量　混ざり少ない
8 白色粘土　地山層
9 暗褐　山砂ブロックを含む
10 暗灰色粘性土　赤褐色粒子多い　水田の床土的
11 暗褐　ローム粒多い　橙色粒散在　中世盛土
12 暗灰褐　やや砂質　ローム小ブロック含む
13 暗褐　11層より黒色味強い　ローム粒少量　水分含み軟質
14 暗灰色粘性土　鉄分の沈着あり
15 暗褐　橙色粒(～2mm)多量　ロームブロック(～10mm)・炭化物粒(～2mm)少量　土器細片含む
16 暗褐　15層より混ざり少なめ　ロームブロックは含まない
17 黒灰色　富士宝永火山灰　1707年降灰
16層内に堆積するが16層を上下に分層できるようには見えない
18 暗褐　やや灰色がかる　炭化物粒(～5mm)・橙色粒(～2mm)少量の他は混ざり少ない

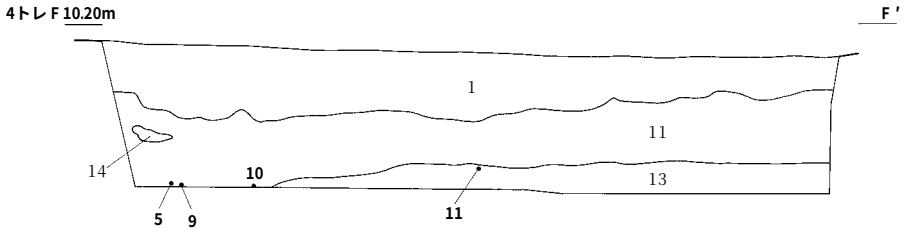


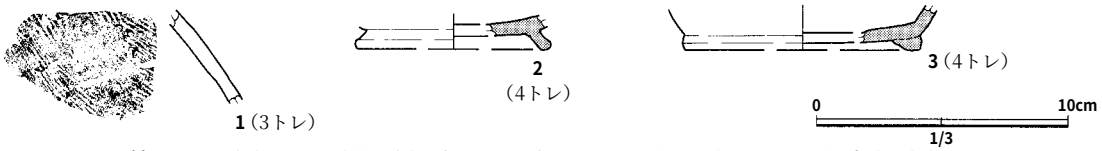




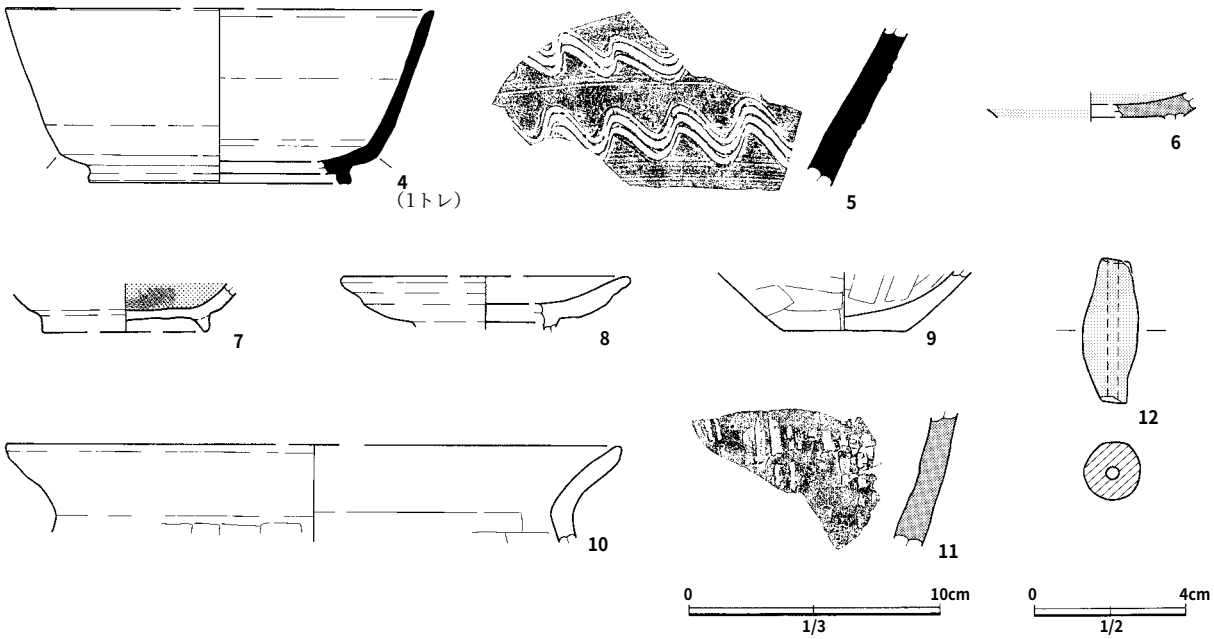








第16図　白船城跡（第6次）全体図、各トレンチ土層断面図・出土遺物（1）



第17図　1・4トレンチ出土遺物（2）

分に造成された、腰曲輪状の平坦地部分にあたるとみられる。ピットなどの遺構は確認できなかった。

遺構と遺物　1トレンチ西端では、下末吉層とみられる白色粘土層が南東に向かって落ち込む部分を調査区内で唯一確認した。地山層直上の土層は均一な黒褐色土が堆積しているが、層序的には人為的な切り土に盛土がなされているものとみられる。1トレ東壁には水田の床土状の暗灰色粘性土（10層）が観察された。2トレンチ南壁では同層が暗褐色土層を縦に切る状況を確認した。かつての水田面の端であろうか。第15図右の昭和36年の空撮写真を見ると、白船城跡は水田に浮かぶ船のようでもあるため、この場所が水田の縁であることもみてとれる。ただ、この10層は60cm以上の堆積がみられ、これだけの厚みの水田床土は考えにくいため、やはり造成の一端なのかもしれない。

4トレンチでは暗褐色土の厚い水平堆積が観察できる。基本的に2・3・11～13・15～16・18層とした土層は同質の暗褐色土をベースとして、ローム粒の多少と色調の明暗の差が若干みられる程度であり、この土をもって中世の盛土造成痕跡という判断をしている。斜面下の地形において、自然堆積としては不自然なほどの水平的な厚みがあり、しかし人為的とみなすにはあまりに均一な（綺麗な）堆積でもある。4トレの掘削底面や2・3・5トレ下層面ではすでに湧水がみられ、これより下層の調査を断念している。ただ、この堆積がどのように収束するのか、その結果を観察できなかったことが、判然としないひとつの原因でもあろう。

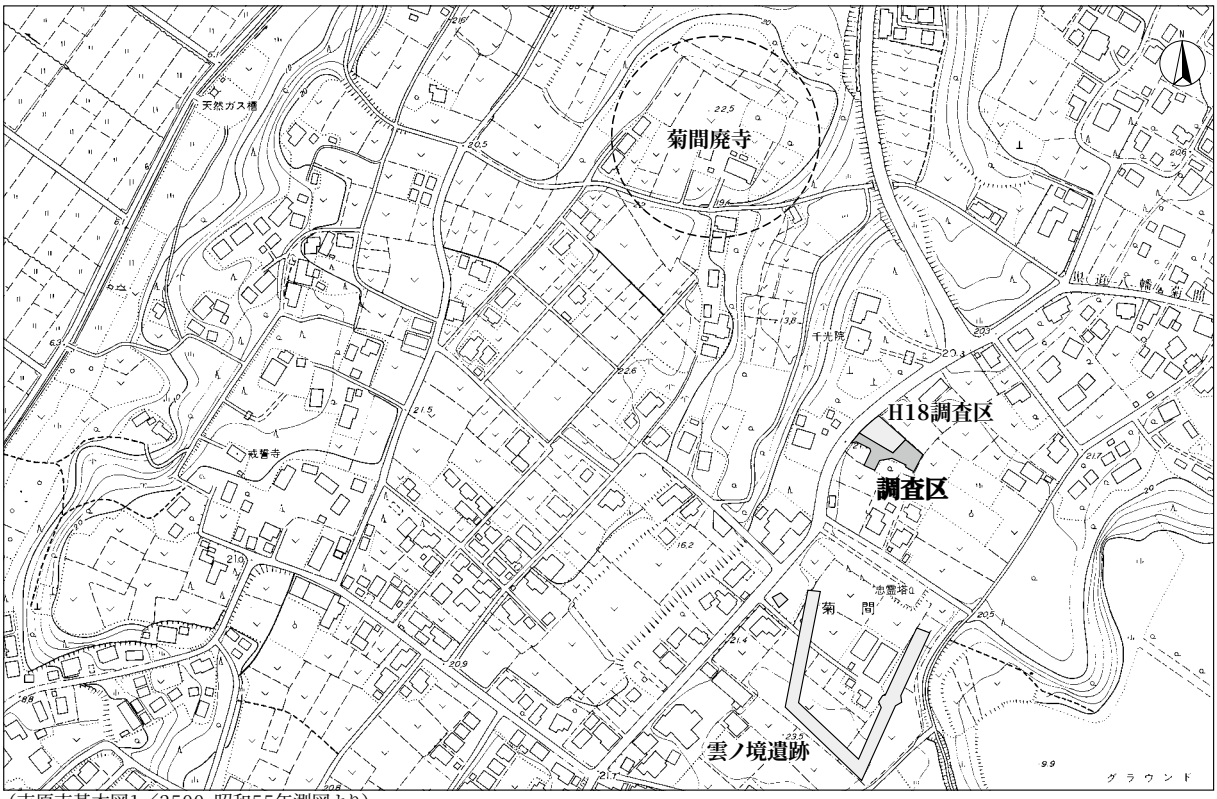
土層中には各時期の遺物も少量含まれており、1トレンチからは第17図4の須恵器の杯が、3トレンチからは第16図1のハケメ調整のある土師器片が出土している。他に図示した遺物はすべて4トレンチ出土である。第16図2と3は灰釉陶器、第17図6は緑釉陶器、7は黒色ミガキを施された土師器杯、8は土師質の小皿、11は渥美産陶器の甕片である。鎌倉期の遺物が堆積土層の下層から出土していることは、当然それ以降のいずれかの時期に堆積したことになる。北西の城郭側斜面からの崩落など、流れ落ちてきた堆積状況にも見えない。人為的堆積＝造成痕跡、と考えておきたい。

6　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点（遺構：図版4･5／出土遺物：図版7･8･10）

遺跡の位置　遺跡は市原台地北端部に位置し、北方750mには上総と下総を分けた村田川が流れる。北西500mで縄文海進時の海食崖とされる台地の縁になり、眼下には市原条里制遺跡がひろがる。南東130mほどで村田川支流が開析した谷をのぞむ。付近の標高は21m前後であり、北西の条里制遺跡との比高差は12～14mであり、南東の谷との比高差は12m前後である。

台地の北端付近には菊間天神山古墳や東関山古墳などで構成される菊間古墳群が展開し、菊麻国造の王墓といわれる。なかでも台地最北端の親皇塚古墳は、前期の前方後方墳として知られる。調査区から北北西に500mの菊間終末処理場は、建設に先立ち菊間手永遺跡の調査がなされ、縄文時代後晩期の貝塚や墓域、弥生時代中期の環濠などが検出され、多大な成果をあげている（近藤敏 1987『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集）。北西200mの畑地周辺では河原寺系の軒丸瓦を含む布目瓦が多く採取されており、菊間廃寺と呼ばれ、8世紀前半の古代寺院跡と想定されている。

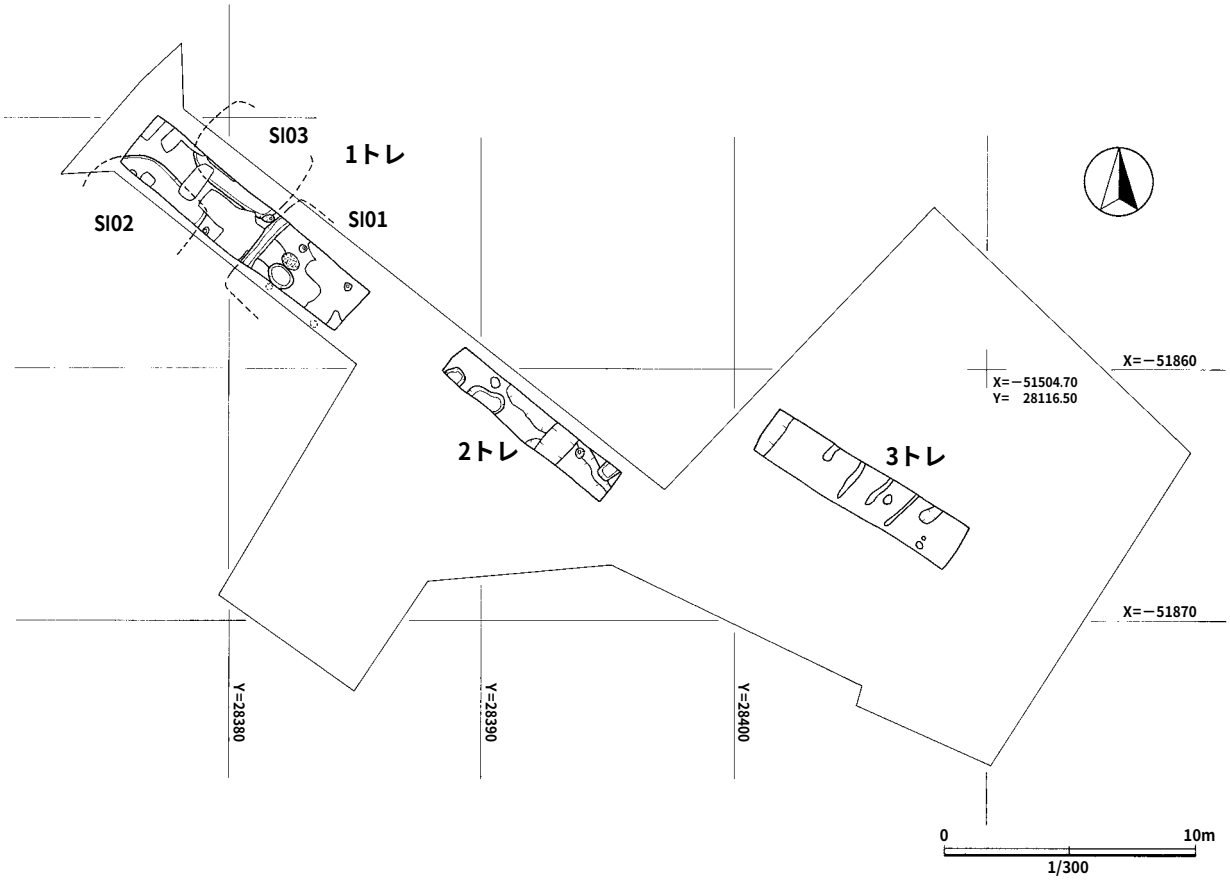
また、近隣では、南に100mほどの雲ノ境遺跡において、ゴルフ場の防球ネット基礎部分の調査を行い、弥生時代から平安時代にかけての竪穴建物跡18軒・古墳1基などを検出している（大村直1991『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡－不特定遺跡発掘調査報告(2)－』財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集）。平成18年度には北側隣接地（第1地点）を調査し、弥生時代後期の竪穴3軒、古墳時代後期の竪穴5軒、平安時代の土坑2基などを確認しており、雲ノ境遺跡の成果とあわせて、該期の集落のひろがりの一端を把握したこととなる。



（市原市基本図1／2500、昭和55年測図より）

0　200m
（1／5,000）

第18図　菊間遺跡群周辺地形図



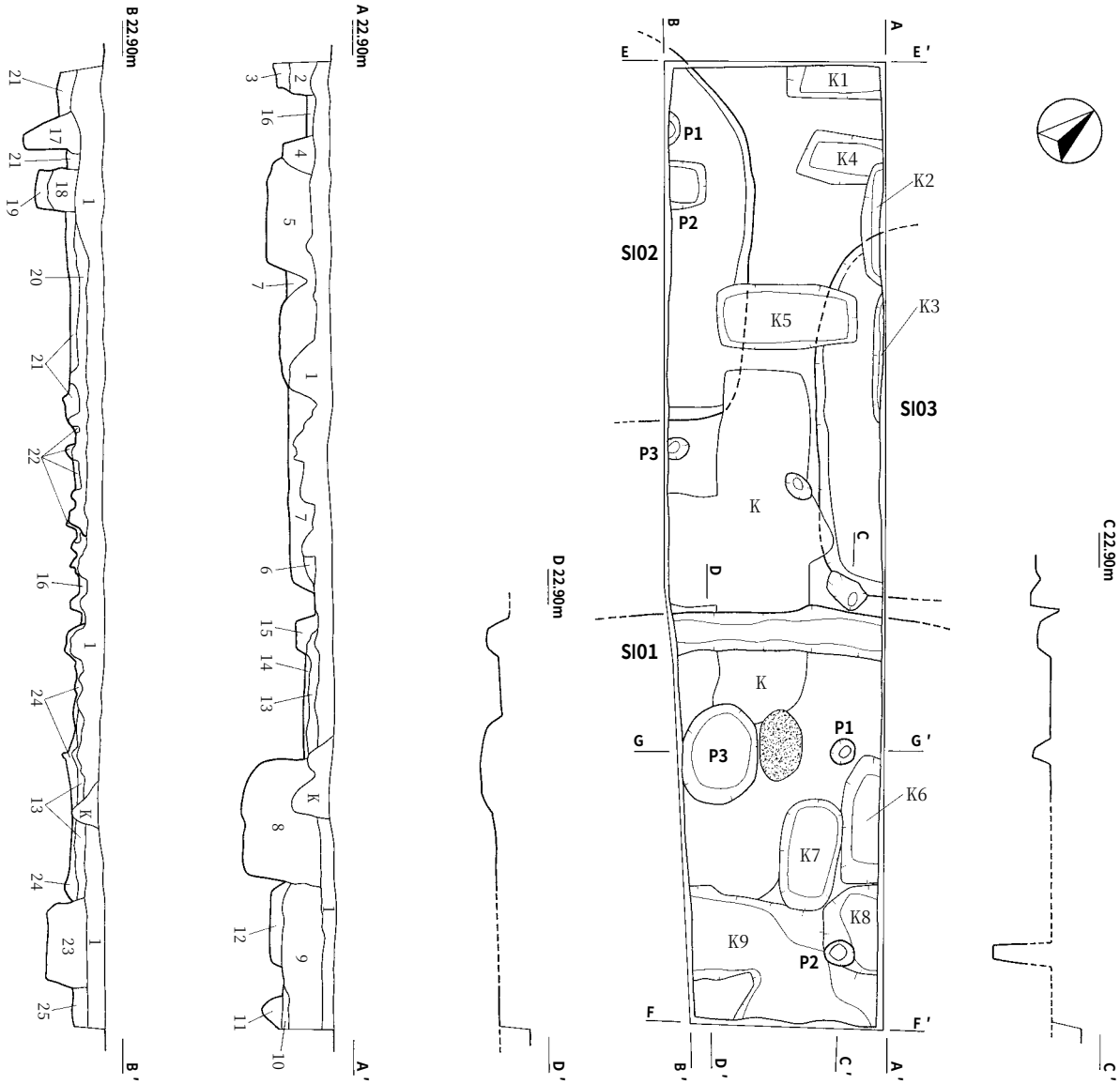
第19図　菊間遺跡群鍛治屋前地区第2地点全体図

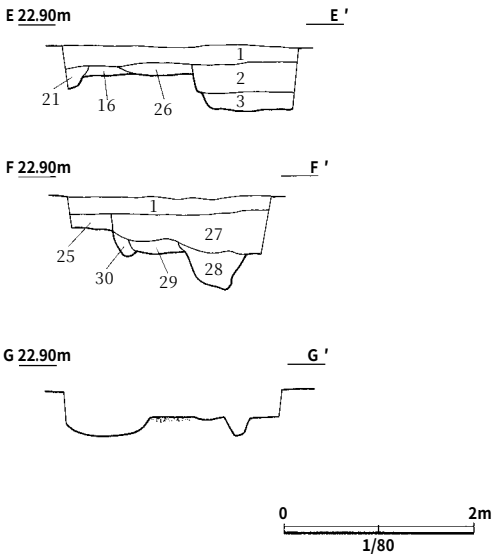
調査概要　個人住宅建設に先立ち調査を実施した。調査区北西端の市道3585号線に接道する部分はスロープ状に切土設計となるため、1トレンチを設定し、確認・本調査とした。庭予定部分の2・3トレンチでは確認調査を実施した。2トレ及び3トレ部分ではすでにハードロームまで土が動いた痕跡が確認され、遺構は検出されなかった。1トレンチでは竪穴建物跡3軒が部分的に確認され、弥生時代後期とみられる2軒の一部と古墳時代前期の遺物を多く含む1軒を調査した。

遺構と遺物　1トレンチでは、時期不明の方形もしくは隅丸方形の土坑が多数掘り込まれており、3軒の竪穴建物跡は平面的にかなり把握しづらい状態となっている。土坑群は現代の撹乱とは断定できず、近代の菊間藩に関わる可能性も考えられることから、Ｋ１～９と整理時に番号をつけた。トレンチ中央のＫは試掘による小トレンチの掘り込みであり、土坑群とは別に考えた。

SI01は北西壁及び壁周溝の一部と炉跡、主柱穴とみられるピット2基を調査した。推定平面規模は5.2×5.2mの隅丸方形で、主軸はN-48°-Wと推定される。現存の壁高は最大10.0cm、壁周溝は幅42～54cmと幅広く、深さは12～18cmである。P1は深さ17.9cm、P2は55.4cmであり、P3は112×83cmの長円形の土坑であり、深さは23.3cmである。P1とP2は位置的に主柱穴であろうと想定したものの、P1の規模は柱穴とするには浅い。P2も周辺で激しく土の移動がみられるため、竪穴に伴うものであるかどうか断定できない。また、P3とした窪みに関しては、上層からの掘り込みとは観察されず、竪穴に伴う掘り形であろうと考えられる。

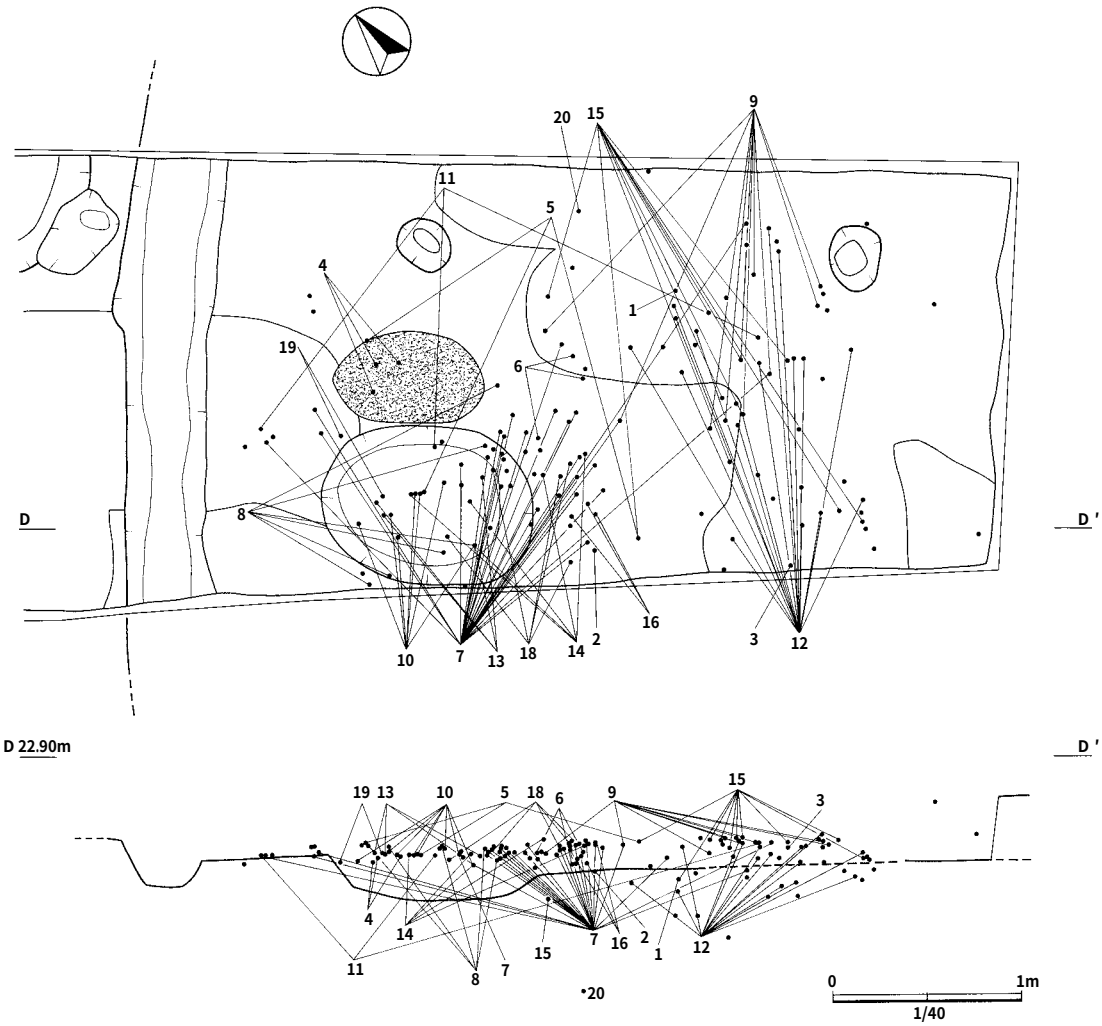
炉跡南西側のP3付近に遺物が集中して出土した。ほとんどの遺物がP3覆土より上層で出土していることから、P3は床下の掘り形であったと推定される。ただ、竪穴自体の覆土は薄く、上層からの





1トレ
1 黒褐　しまりなし　表土
2 暗褐　ローム小ブロック多い
3 暗褐　2層より暗色　ロームブロック含む
4 暗褐　ロームブロック多い
5 暗褐　ロームブロック含む
6 暗褐　7層より暗色　SI03覆土上層
7 暗褐　やや黄色味強くローム粒均一に含む　SI03覆土
8 暗褐　ロームブロック多い
9 暗褐　黒色味強くロームブロック・炭化物粒・山砂含む
10 暗褐　ローム小ブロック多い　しまり強い
11 暗褐　ローム粒～小ブロック含む
12 暗褐　9層より黄色味強くロームブロック多い
13 黒褐　ローム粒・炭化物粒含む　SI01覆土上層
14 暗褐色土＋ソフトローム　SI01貼り床か　硬化はしていない
15 暗褐　黄色味強くローム粒多い　SI01壁周溝覆土
16 暗褐色土＋ソフトローム　ロームとの漸移層
17 暗褐　黒色味強い　ローム小ブロック少量
18 暗褐　黒色味強い　ロームブロック含む
19 黒褐　ロームブロック含む
20 黒褐　ローム粒～ブロック含む
21 暗褐　褐色味強い　ローム粒少量　SI02覆土
22 黄褐　ソフトローム
23 暗褐　黒色味強い　ローム粒・炭化物粒多い
24 暗褐　黄色味強い　ローム小ブロック含む　SI01貼り床か
25 暗褐　ローム粒少量　SI01覆土
26 暗褐　1層に似る　炭化物粒含む　ややしまる
27 暗褐　ローム粒～小ブロック・炭化物粒・粘土小ブロック含む
28 暗褐　ロームブロック含む
29 暗褐　ロームブロック多い
30 黒褐　ロームブロック少量

第20図　1トレンチ実測図



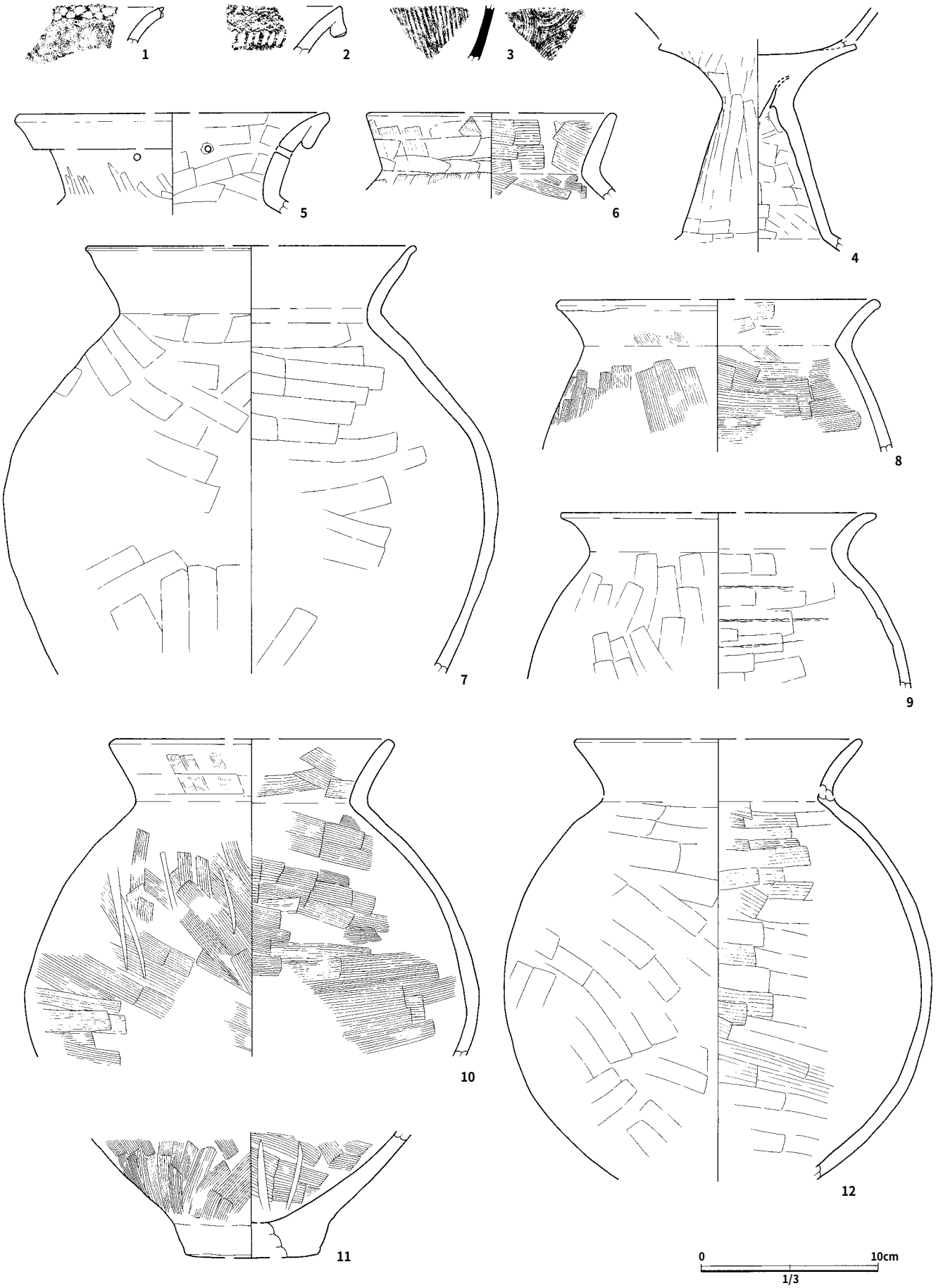
第21図　1トレンチSI01遺物分布図

耕作などの掘り込みの影響も多くあるため、これらの集中する遺物が原位置であるかどうかは判断できない。第21図の遺物分布図をみると、9や12・15などの甕の破片の大半は撹乱された中から出土している。そして、そのような破片の出土レベルと、撹乱部分ではないとみられる炉周辺の遺物の出土レベルがほぼ同じである点を、どう考えたらよいのか判断に迷うところである。

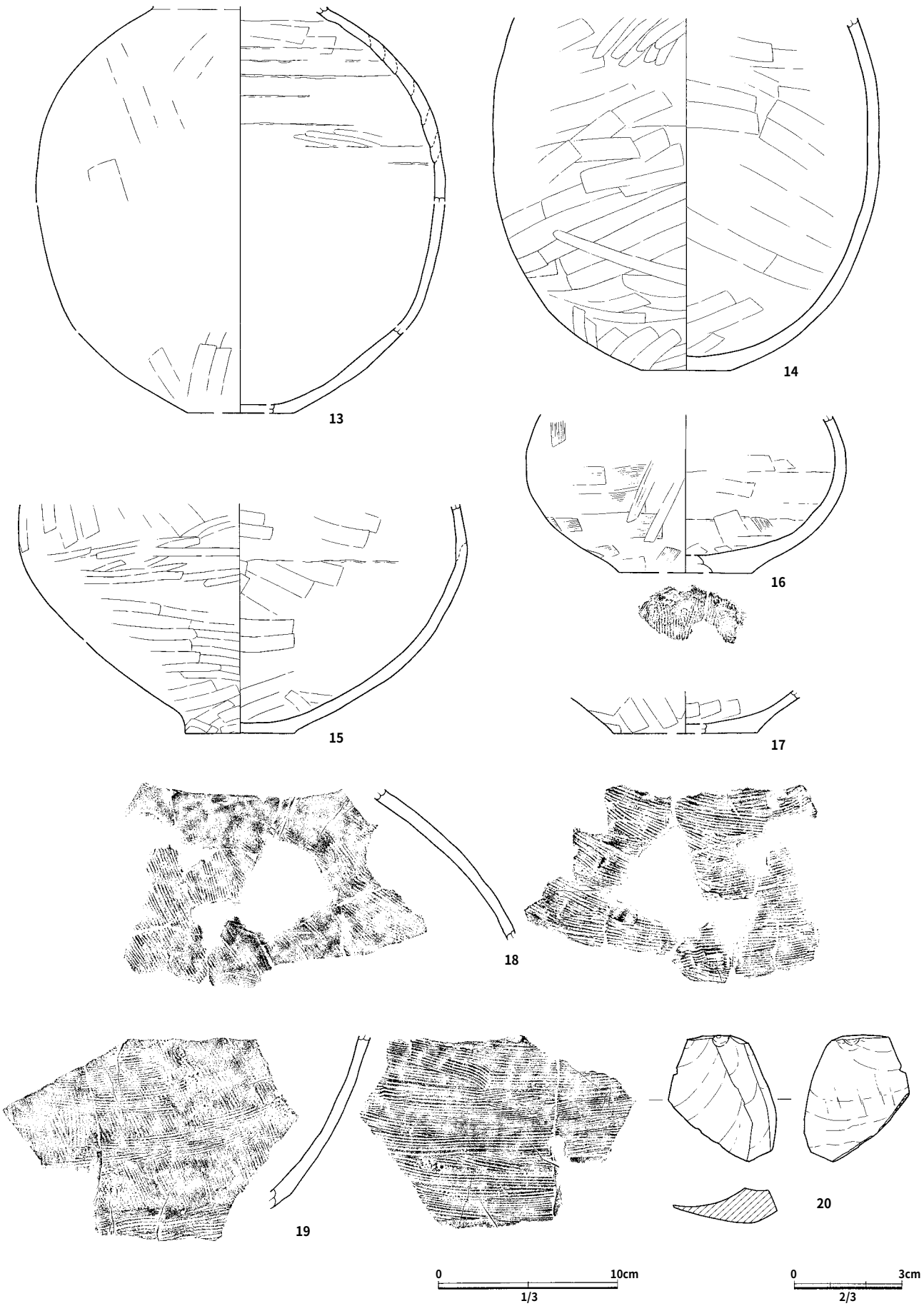
第22図1～3は周囲から混入した遺物であろう。4は炉跡から出土した高杯の脚部であるが、他の土器よりやや新しく、古墳時代中期に近い時期のものとみられる。杯の稜部分に段がつくもので、その段より上部が剥離した状態である。他の大半の土師器はハケメ調整をもつため、遺物の時期の主体は前期にあるとみられる。10と11は同一個体である可能性もある。第23図13も胴部と底部で接点はないものの、同一個体とみなした。

20は使用痕のある剥片石器であり、石材はめのうとみられる。K1土坑の底面付近で出土しており、SI01とは異なる時期の所産であろう。

SI02とSI03は、ともにわずかな部分を検出した。その形状から弥生時代後期の竪穴建物跡と想定し、北西方向に主軸方位をもつとみられる。SI02は推定長軸4.5m、SI03は4.3mである。SI02内のP1・P2としたピットは、土層観察からは竪穴に伴うものかどうか判断できない。P2はその形状からみて、一連の土坑群（K1～）の一部の可能性もある。P1の深さは48.1cm、P2は35.7cmである。P3は竪穴の外側にあるが、撹乱を受けていない部分であるためピットとした。深さ11.9cmと浅い。



第22図　1トレンチSI01出土遺物（1）



第23図　1トレンチSI01出土遺物（2）

7　出土遺物観察表　（計測単位はcm）

山木遺跡群 市道地区第2地点

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
1トレ	4	1	SD01	土師器	高杯			(10.0)	1/4			雲母多い、骨針少量	良好	橙～黒	外面脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ／内面脚部ハケナデ後下部ヘラケズリ	古墳時代前期
1トレ	4	2	SD02	緑釉陶器	皿			(8.0)	1/8			灰白・緻密／混ざり無し	良好	釉色淡緑	内外面ヘラミガキ・高台貼り付け後全面施釉	
1トレ	4	3	SD02	須恵器	蓋	3.1（つまみ）						灰・緻密／雲母多い	良好	黒灰	外面ロクロナデ	つまみ部分
1トレ	4	4	SD02	須恵器	甕							灰・やや粗い／雲母・白色粒 (～ 0.5mm) 多い、骨針少量	良好	灰	外面平行タタキ／内面ヘラナデ	千葉産
1トレ	4	5		須恵器	甕							暗灰・緻密／白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、骨針少量	良好	暗灰	外面平行タタキ／内面ヘラナデ	
1トレ	4	6	SD02	須恵器	甕							暗灰・緻密／白色粒 (～ 1mm) 多い、骨針少量	良好	暗灰	外面平行タタキ／内面受け具による青海波文	
1トレ	4	7	SD02	土師器	杯	(12.0)	1/8	(6.1)			3.9	赤褐色粒（～ 0.5mm）・雲母少ない、骨針少量	良好	橙～明褐	外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面ロクロナデ	
1トレ	4	8	SD02	土師器	足高高台杯			(9.3)	1/10			雲母多い、黒色粒 (～ 0.5mm) 少ない、 白色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	橙～明褐	内外面ロクロナデ	
1トレ	4	9		土師器	杯			5.4	1/2			赤褐色粒 (～ 1mm) 少ない、白色粒（～ 0.5mm）・雲母・骨針少量	良好	橙～明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
1トレ	4	10	SD02	カワラケ	小皿			4.8	1/2			雲母多い、石英少量	良好	褐～黒褐	内外面ロクロナデ・底部静止糸切り後無調整／内面見込みに一部ナデ	
1トレ	4	11	SD02	カワラケ	小皿			4.0	1/1			雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	明橙	内外面ロクロナデ・底部静止糸切り後無調整／内面見込みに一部ナデ	
2トレ	5	1	SI02	土師器	甕							雲母・骨針少量	良好	黒褐	内外面ハケナデ	
2トレ	5	2		瓦	平瓦							白色粒 (～ 0.5mm) 多い、骨針少量	良好	灰	凹面布目／凸面縄目タタキ	427.3g
3トレ	6	1	SI01	土師器	甕	(27.7)	1/24					白色粒 (～ 0.5mm) 多い、黒色粒 (～ 0.5mm)･赤褐色粒 (～ 1.5mm) 少ない、石英・骨針少量	良好	褐～暗褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ナデ	

郡本遺跡群（第13次）

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
2トレ	9	1		須恵器	甕							明灰・緻密／白色粒 (～ 1mm) 多量、黒色粒 (～ 1mm) 少量	良好	灰	内外面ナデ	
2トレ	9	2	SI01	陶器	椀	(13.6)	1/8					明灰・やや粗い／黒色粒 (～ 0.5mm)・砂粒 (～ 2mm) 少量	良好	明灰	内外面ロクロナデ	産地・時期不明
2トレ	9	3	SK08	カワラケ	杯			6.5	1/1			白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、骨針少量	良好	明褐	外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面見込みほぼ全面をナデ	底面に敷物痕有り
2トレ	9	4	SK08	カワラケ	小皿			4.8	2/3			赤褐色粒 (～ 1mm)・雲母多い、骨針少量	良好	橙	外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面一部ナデ	
2トレ	9	5	SK02	カワラケ	杯			(5.8)	1/2			雲母少ない、赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	明褐～明橙	外面ロクロナデ・底部静止糸切り後無調整／内面見込みに一部ナデ	
2トレ	9	6		土師器	杯			7.0	5/6			白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、赤褐色粒 (～ 1mm)・ 石英 (～ 1mm)・骨針少量	良好	橙～明褐	外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面ロクロナデ	
2トレ	9	7	SK02	瓦	平瓦							白色粒 (～ 1mm) 多い、小礫 (～ 3mm) 少量	良好	灰～灰褐	凹面布目／凸面縄目タタキ	327.5g
2トレ	9	8	SK07	陶器	甕			17.0	1/2			白色粒 (～ 0.5mm)・小礫多い、黒色粒 (～ 1mm)・石英少量	良好	赤褐	外面雑にナデか？／内面ヘラと指で整形	常滑産　底部が大きく歪む
2トレ	9	9	SI01	土師器	甕					26.6		赤褐色粒 (～ 0.5mm)・雲母少量	良好	橙	外面頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
3トレ	10	1	SD01	須恵器	鉢	(12.6)	1/4					明灰・緻密／白色粒 (～ 0.5mm) 多い、黒色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	灰	外面ロクロナデ・体部下端ヘラケズリ／内面ロクロナデ	
3トレ	10	2	SD01	須恵器	甕							明灰・緻密／白色粒 (～ 1mm)・黒色粒 (～ 1mm) 少ない	良好	暗灰	外面平行タタキ／内面ナデ	
3トレ	10	3	SD01	陶器	卸目付大皿							灰白・緻密／白色粒 (～ 1mm) 少ない、黒色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	釉色淡緑	内外面ロクロナデ・内面に櫛描きで卸し目を刻む・体部上半に釉を漬け掛け	瀬戸・美濃系　古瀬戸後III期
3トレ	10	4	SD01	陶器	椀			(11.2)	1/5			灰白・やや粗い／砂粒 (～ 1mm) 少ない、雲母少量	良好	明灰	内外面ロクロナデ・高台貼り付け	高台畳付に沈線を巡らせる　産地・時期不明
3トレ	10	5	SD01	白磁	椀							灰白・緻密／混ざり無し	良好	淡黄～灰白	内外面ロクロナデ	12C
3トレ	10	6	SD01	白磁	椀	(7.2)	1/6					灰白・緻密／石 (～ 2mm) 少量	良好	釉色淡緑白	外面高台削り出し・高台外面の一部及び内面に施釉	12 ～ 13C
3トレ	11	7	SD01	土師器	杯	(13.2)		(7.4)	1/4		3.5	白色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 1mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整	
3トレ	11	8	SD01	在地土器	柱状高台土器			4.6	2/3			雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みにナデ	

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
3トレ	11	9	SD01	在地土器	柱状高台土器			7.4				雲母多い、赤褐色粒 (～ 2mm)・白色粒 (～ 0.5mm) 少ない、骨針少量	良好	明褐	外面柱状高台部分ロクロナデ後一部指ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	10	SD01	在地土器	高杯							赤褐色粒 (～ 1mm)・雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少ない、骨針少量	良好	橙	内外面ナデ	11 ～ 12C
3トレ	11	11	SD01	カワラケ	小皿	(7.1)	1/10	5.2	1/2		1.9	赤褐色粒 (～ 3mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	12	SD01	カワラケ	杯	12.0	2/3	6.0	2/3		3.0	雲母多い、白色粒 (～ 1mm) 少ない、赤褐色粒 (～ 2mm) 少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	13	SD01	カワラケ	杯	12.0	1/2	5.6	1/1		3.6	白色粒 (～ 0.5mm) 多い、雲母・骨針少ない、石英少量	良好	明橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	14	SD01	カワラケ	小皿	8.4	2/3	4.4	1/1		2.5	赤褐色粒 (～ 0.5mm)・雲母・骨針少量	良好	明褐～灰褐	内外面ロクロナデ・底部静止糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	15	SD01	カワラケ	杯			6.0	1/1			白色粒 (～ 0.5mm)・雲母少量	良好	明褐～黒	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	16	SD01	カワラケ	杯			5.2	1/1			雲母少ない、赤褐色粒 (～ 2mm)・骨針少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込み全面をナデ	
3トレ	11	17	SD01	カワラケ	杯			5.8	4/5			雲母・骨針多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後体部～底部にかけて一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	重ね焼き痕有り
3トレ	11	18	SD01	カワラケ	杯	12.8	1/2	6.0	1/1		3.3 ～ 3.8	白色粒 (～ 0.5mm) 多い、黒色粒 (～ 0.5mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	19	SD01	カワラケ	杯	11.8	1/1	6.5	1/1		3.0 ～ 3.5	白色粒 (～ 0.5mm)・骨針多い、黒色粒 (～ 0.5mm)・雲母・石英少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後体部～底部にかけて一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	20	SD01	カワラケ	杯	(12.0)	1/3	5.0	1/1		2.8 ～ 3.2	白色粒 (～ 1mm)・雲母少ない、黒色粒 (～ 1mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	21	SD01	カワラケ	杯	12.0	1/2	6.4	1/3		3.9	白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面見込みにナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	22	SD01	カワラケ	杯			6.0	2/3			雲母多量、白色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みにナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	23	SD01	カワラケ	杯			6.5	3/4			雲母多い、赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	24	SD01	カワラケ	杯			5.5	1/2			雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少ない、赤褐色粒 (～ 1mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	25	SD01	カワラケ	小皿	(8.0)	1/8	4.2	3/4		1.8	雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	橙～明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みにナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	26	SD01	カワラケ	小皿	8.0	1/3	4.3	1/1		1.8	雲母多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少ない、骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	27	SD01	カワラケ	小皿	8.0	1/1	4.0	1/1		1.9 ～ 2.3	白色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	橙～明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	28	SD01	カワラケ	小皿	(8.0)	1/3	4.0	1/1		2.1	白色粒 (～ 0.5mm)・黒色粒 (～ 0.5mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込み全面をナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	29	SD01	カワラケ	小皿	7.4	1/16	3.8	1/2		2.4	赤褐色粒 (～ 1mm) 少ない、黒色粒 (～ 0.5mm)・雲母少量	良好	明褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	底面に敷物痕有り
3トレ	11	30	SD01	カワラケ	小皿			4.0	3/4			石英・雲母・白色粒 (～ 0.5mm) 多い、骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みにナデ	
3トレ	11	31	SD01	カワラケ	小皿			3.6	2/3			白色粒 (～ 0.5mm) 少ない、黒色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 0.5mm)・雲母少量	良好	明黄褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	32	SD01	白カワラケ	杯			(5.0)	1/5			雲母多い、赤褐色粒 (～ 1.5mm)・骨針少量	良好	明黄白～明灰	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後無調整／内面見込みに一部ナデ	
3トレ	11	33	SD01	カワラケ	杯			(8.0)	1/2			白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、赤褐色粒 (～ 2mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ・内面見込みにナデ	
3トレ	11	34	SD01	カワラケ	杯			(8.1)	1/12			雲母多い、赤褐色粒 (～ 2mm) 少量	良好	明黄褐	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ	
3トレ	11	35	SD01	カワラケ	杯			6.6	3/5			雲母少量	良好	黄橙	内外面ロクロナデ・底部静止糸切り後無調整／内面見込みにナデ	
3トレ	11	36	SD01	カワラケ	小皿			5.0	1/1			雲母少ない、白色粒 (～ 0.5mm)・赤褐色粒 (～ 0.5mm)・骨針少量	良好	橙	内外面ロクロナデ・底部回転糸切り後一部ナデ／内面見込み全面をナデ	底面に敷物痕有り

村上遺跡群 門前地区

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
2トレ	14	1	SD01	須恵器	甕							灰・緻密／白色粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、黒色粒 (～ 0.5mm) 少ない	良好	灰	外面平行タタキ／内面ナデ	
2トレ	14	2	SK02	カワラケ	小皿			(6.0)	1/4			雲母・黒色粒 (～ 0.5mm) 多い、白色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	明橙	底部回転糸切り後無調整か／内面見込みに一部ナデ	
2トレ	14	3	SK02	土師器	土錘					1.4	2.9	砂粒 (～ 0.5mm)・雲母多い、赤褐色粒 (～ 0.5mm)・白色粒 (～ 0.5mm) 少量	良好	橙		4.9g

白船城跡（第6次）

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
3トレ	16	1		土師器	甕							白色粒 (～0.5mm) 多い、赤褐色粒 (～0.5mm)・雲母・骨針少量	良好	橙	外面ハケナデ一部ヘラミガキ／内面ヘラナデ後一部ヘラミガキ	
4トレ	16	2		灰釉陶器	椀もしくは皿			(7.6)	1/4			灰白・緻密／白色粒 (～1.5mm) 少ない、黒色粒 (～1.5mm) 少量	良好	灰白	内外面ナデ・高台貼り付け	
4トレ	16	3		灰釉陶器	瓶類			(9.3)	1/4			灰白・緻密／白色粒 (～1mm) 少量	良好	灰白	外面ロクロナデ・高台貼り付け／内面ロクロナデ	
1トレ	17	4		須恵器	杯	(17.0)	1/8	10.4	1/3		6.9	灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 多い、骨針少量	良好	灰	外面ロクロナデ・高台貼り付け／内面ロクロナデ	
4トレ	17	5		須恵器	甕							灰・緻密／白色粒 (～2mm) 多い、黒色粒 (～0.5mm) 少ない	良好	暗灰～黒	外面ナデ後櫛描波状文／内面ナデ	
4トレ	17	6		緑釉陶器	椀もしくは皿			(7.4)				灰白・密／混ざり無し	良好	釉色緑	内外面ヘラミガキ後全面施釉	
4トレ	17	7		土師器	杯			(6.6)	1/4			雲母少ない、黒色粒 (～0.5mm)・骨針少量	良好	橙	外面ロクロナデ・底部回転糸切り後高台貼り付け／内面黒色ミガキ	
4トレ	17	8		土師器	皿	(11.4)	1/6					雲母少ない、赤褐色粒 (～0.5mm)・白色粒 (～0.5mm) 少量	良好	橙	内外面ナデ	
4トレ	17	9		土師器	甕	4.8	1/2					石英多い、砂粒 (～1mm) 少量	良好	黒～黒褐	外面～底部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
4トレ	17	10		土師器	甕	(24.2)	1/12					白色粒 (～2mm)・雲母・石英多い、赤褐色粒 (～2mm)・骨針少量	良好	橙～褐	外面口縁部～頸部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラナデ	
4トレ	17	11		陶器	甕							灰・緻密／白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	灰	外面ナデ後平行タタキ／内面ヘラナデ	渥美産
4トレ	17	12		土師器	土錘					1.5	3.8	雲母・骨針少量	良好	橙	外面赤彩	7.4g

菊間遺跡群 鍛冶屋前地区第2地点

トレンチ	挿図番号	遺物番号	遺構	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土　含有物	焼成	色調	調整	その他
1トレ	22	1	K7	弥生土器	甕							白色粒 (～0.5mm) 多い、雲母少ない、骨針少量	良好	橙	外面ヘラナデ・口唇部交互押捺／内面ナデ・ヘラミガキ	
1トレ	22	2	K2・K4・SI01	弥生土器	壺							白色粒 (～0.5mm)・雲母少ない	良好	茶褐～橙	外面口縁部網目状撚糸文・キザミ・赤彩／内面ナデ・ヘラミガキ・赤彩	
1トレ	22	3	K9	須恵器	甕							灰白・緻密／白色粒 (～0.5mm) 多い	良好	灰白	外面平行タタキ／内面受け具による青海波文	
1トレ	22	4	SI01	土師器	高杯							白色粒 (～0.5mm)・雲母多い、骨針少量	良好	褐	外面ヘラケズリ・脚部ヘラケズリ後ヘラナデ・赤彩／内面杯部ヘラナデ・脚部ヘラナデ	杯部の稜部分より上半が剥離欠失・炉内出土
1トレ	22	5	SI01	土師器	壺	(17.6)	1/4					白色粒 (～0.5mm) 多い、雲母・骨針少量	良好	橙	外面ナデ後一部頸部ミガキ有り／内面ナデ	焼成後の穿孔あり　補修孔か
1トレ	22	6	SI01	土師器	甕	14.0	1/4					石英多い、白色粒 (～0.5mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	赤橙	外面口縁部～頸部を縦にハケナデ後、横にヘラナデ／内面口縁部～頸部ハケナデ	
1トレ	22	7	SI01	土師器	甕	(18.6)				(27.7)		白色粒 (～0.5mm) 多い、雲母少ない、骨針少量	良好	明褐～暗褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ後、上半をヘラナデ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	
1トレ	22	8	SI01	土師器	甕	(18.2)	1/10					白色粒 (～0.5mm) 多い、骨針少量	やや甘い	赤褐～赤橙	外面口縁部ハケナデ後ナデ・胴部ハケ／内面口縁部ハケナデ後ヘラナデ・胴部ハケナデ	
1トレ	22	9	SI01	土師器	甕	(18.2)	1/13					白色粒 (～0.5mm) 多い、赤褐色粒 (～2mm)・骨針少量	良好	黄褐～明褐	外面口縁部ナデ・胴部ヘラケズリ／内面口縁部ナデ・胴部ヘラナデ	内面に輪積み痕多く残る
1トレ	22	10	SI01	土師器	甕	(16.4)	1/14			(25.2)		白色粒 (～0.5mm)・石英多い、赤褐色粒 (～1mm)・雲母・骨針少量	良好	黄褐～暗褐	外面口縁部ハケナデ後ヘラナデ・胴部ハケナデ後一部ヘラナデ／内面口縁部ハケナデ後ヘラナデ・胴部ハケナデ	
1トレ	22	11	SI01	土師器	甕			(7.4)	1/3			雲母・骨針少量	良好	褐～灰褐	外面ハケナデ／内面ハケナデ後一部ヘラナデ	
1トレ	22	12	K9	土師器	甕	(16.2)	1/5			(24.0)		白色粒 (～0.5mm)・石英多い、赤褐色粒 (～1mm)・骨針少量	良好	褐～暗褐	外面口縁部ヘラナデ・胴部ヘラケズリ／内面ヘラもしくはハケナデ	
1トレ	23	13	SI01	土師器	甕			(5.9)	1/6			白色粒 (～0.5mm) 多い、砂粒 (～4mm)・骨針少量	やや甘い	赤褐～赤橙	外面器面表面剥離により不明瞭・ヘラナデか／内面剥離により不明瞭・ヘラナデか	内面に輪積み痕多く残る
1トレ	23	14	SI01	土師器	甕			5.0	1/1			白色粒 (～0.5mm) 多い、黒色粒 (～0.5mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	褐～暗褐	外面ヘラケズリ・胴部上半ヘラケズリ後一部ヘラナデ（ミガキ状）／内面ヘラナデ	
1トレ	23	15	SI01	土師器	甕			6.0	3/4			白色粒 (～0.5mm) 少ない、雲母・骨針少量	良好	明褐～褐	外面ヘラケズリ・胴部上半ヘラケズリ後ナデ・胴部下半ヘラケズリ後ヘラナデ（ミガキ状）／内面ヘラナデ	
1トレ	23	16	SI01	土師器	甕			(6.4)	1/3			白色粒 (～0.5mm) 多量、石英・雲母・骨針少量	やや甘い	明橙～橙	外面ヘラケズリ後ハケナデ／内面ハケナデ後ヘラナデ	
1トレ	23	17		土師器	甕			(8.0)	1/4			雲母多い、白色粒 (～0.5mm) 少ない	良好	橙～茶褐	外面ヘラケズリ後ヘラナデ／内面ヘラナデ	
1トレ	23	18	SI01	土師器	甕							白色粒 (～0.5mm)・石英・雲母・骨針少量	良好	明褐	内外面ハケナデ	
1トレ	23	19	SI01	土師器	甕							石英多い、雲母・骨針少量	良好	黄褐	内外面ハケナデ	
1トレ	23	20	K6	剥片石器								めのう		にぶい黄		8.9g　端部に使用痕のある剥片

山木遺跡群　2トレンチ調査風景　南東から

山木遺跡群　1トレンチ遺構確認面　北東から

山木遺跡群　1トレンチSD01(奥)・SD02(前)　南東から

山木遺跡群　2トレンチ遺構確認面　西から

山木遺跡群　2トレンチ　南から

山木遺跡群　2トレンチSB01　北西から

山木遺跡群　2トレンチSI02・SI03　北から

山木遺跡群　3トレンチ　南から

図版 2

郡本遺跡群13次　3トレンチ調査風景

郡本遺跡群13次　2トレンチ調査風景

郡本遺跡群13次　1トレンチ　北東から

郡本遺跡群13次　2トレンチ遺物出土状況　北東から

郡本遺跡群13次　2トレンチSI01・SK01遺物出土状況　北西から

郡本遺跡群13次　3トレンチSD01土層断面　西から

郡本遺跡群13次　3トレンチSD01 サブトレ2　北から

郡本遺跡群13次　3トレンチSD01 サブトレ3　南から

郡本遺跡群13次　3トレンチ西壁 SD01土層断面

村上遺跡群　調査風景　南から

村上遺跡群　1トレンチSP01　北西から

村上遺跡群　2トレンチSP02　南から

村上遺跡群　2トレンチSP02-P3土層断面　北西から

村上遺跡群　2トレンチSD01(右)・SD02(左)　東から

村上遺跡群　2トレンチSK01、SP03-P2･P3　南から

村上城跡の土塁跡とされる高まり　左奥が調査区　南から

白船城跡6次　調査風景　南西から

白船城跡6次　1トレンチ遺物出土状況　北東から

白船城跡6次　1トレンチ南西壁土層断面　東から

白船城跡6次　2トレンチ南西壁土層断面　東から

白船城跡6次　4トレンチ東壁土層断面　南から

白船城跡6次　5トレンチ　南から

白船城跡6次　4トレンチ調査風景　西から

菊間遺跡群　調査風景　南東から

菊間遺跡群　1トレンチSI01遺物出土状況　南東から

菊間遺跡群　SI01遺物出土状況　北西から

菊間遺跡群　SI01　南東から

菊間遺跡群　SI01　北から

菊間遺跡群　SI02　南西から

菊間遺跡群　SI03　北東から

菊間遺跡群　2トレンチ　南東から

菊間遺跡群　3トレンチ　南東から

山木1トレ2

山木1トレ8

郡本2トレ8

郡本3トレ1

郡本3トレ4

郡本3トレ7

郡本3トレ8

郡本3トレ9

郡本3トレ10

郡本3トレ11

郡本3トレ12

郡本3トレ13

郡本3トレ14

郡本3トレ15

郡本3トレ16

郡本3トレ17

郡本3トレ18

郡本3トレ19

郡本3トレ20

郡本3トレ21

郡本3トレ22

郡本3トレ24

郡本3トレ23

郡本3トレ25

郡本3トレ26

郡本3トレ27

郡本3トレ28

郡本3トレ29

郡本3トレ30

郡本3トレ33

郡本3トレ34

郡本3トレ36

白船1トレ4

白船4トレ2

白船4トレ3

白船4トレ7

白船4トレ9

菊間SI01-4

菊間SI01-6

菊間SI01-7

菊間SI01-8

菊間SI01-9

菊間SI01-11

菊間SI01-10

菊間SI01-13

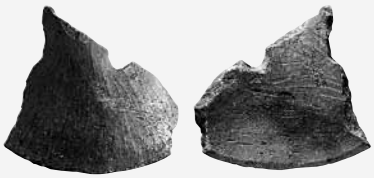
菊間SI01-14

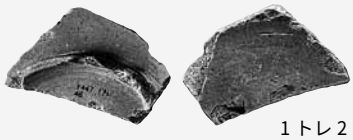
菊間SI01-15

菊間SI01-16

菊間SI01-17

山木遺跡群市道地区第 2 地点

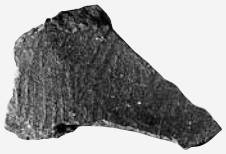

1 トレ 1


1 トレ 2

1 トレ 3

1 トレ 4

1 トレ 5



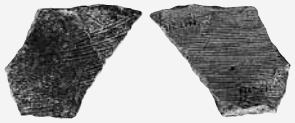
1 トレ 6

1 トレ 7

1 トレ 9

1 トレ 10

1 トレ 11


2 トレ 1

2 トレ 2

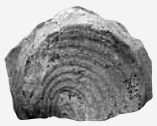
3 トレ 1

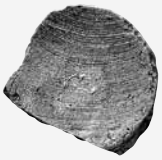
郡本遺跡群 (第 13 次)

2 トレ 1

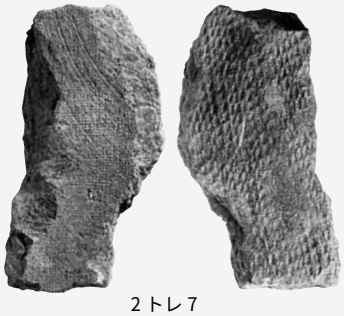
2 トレ 2

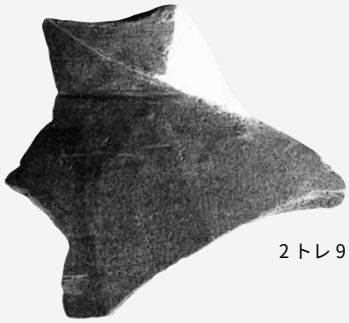
2 トレ 3


2 トレ 4

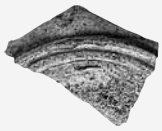

2 トレ 5

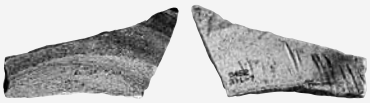
2 トレ 6


2トレ7

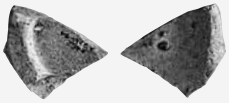

2トレ9

3トレ2


3トレ4


3トレ3

3トレ5


3トレ6

3トレ7

3トレ8

3トレ9
（内面）

3トレ11

3トレ12

3トレ13

3トレ14

3トレ15

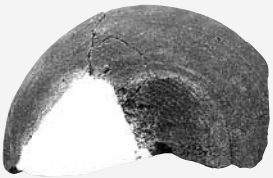
3トレ17

3トレ16

3トレ18

3トレ19

3トレ20


3トレ21

3トレ22

3トレ23

3トレ24

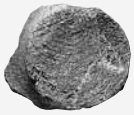
3トレ25

3トレ26

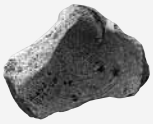
3トレ27

3トレ28

3トレ29


3トレ30

3トレ31


3トレ32

3トレ33

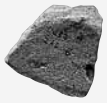
3トレ34

3トレ35

3トレ36

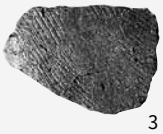
村上遺跡群門前地区

2 トレ 1

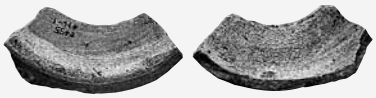

2 トレ 2

2 トレ 3

白船城跡 (第 6 次)


3 トレ 1

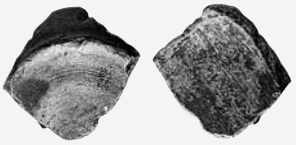
4 トレ 2

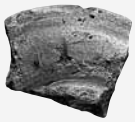

4 トレ 3

1 トレ 4

4 トレ 5

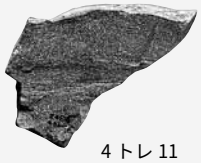
4 トレ 6


4 トレ 7


4 トレ 8

4 トレ 9

4 トレ 10


4 トレ 11

4 トレ 12

菊間遺跡群鍛冶屋前地区第 2 地点

SI01-1

SI01-2

SI01-3

SI01-5-1

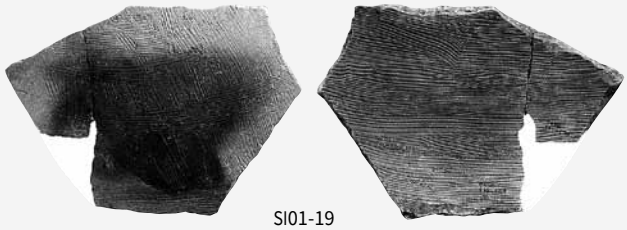
SI01-5-2

SI01-5-3

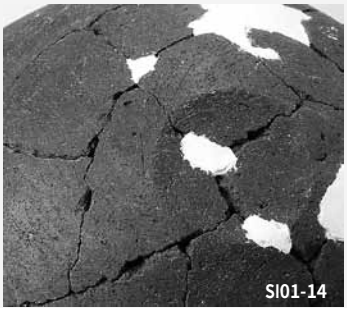
SI01-12

SI01-13

SI01-18


SI01-19

SI01-20


SI01-14

SI01-16

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいせい21ねんどいちはらしないいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	平成21年度市原市内遺跡発掘調査報告
副 書 名	山木遺跡群市道地区第２地点・郡本遺跡群（第13次）・村上遺跡群門前地区・白船城跡（第６次）・菊間遺跡群鍛冶屋前地区第２地点
巻　　次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第16集
編 著 者 名	牧野光隆
編 集 機 関	市原市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　　TEL 0436(41)9000
発行年月日	2010年3月24日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
山木遺跡群市道地区第２地点（やまきいせきぐんいちみちちくだいにちてん）	市原市山木字市道1027番7（いちはらしやまきあざいちみち）	12219	セ447	35°31′26″	140°08′02″	20090420～20090430	43㎡／435.24㎡ 確認調査 7㎡ 本調査	個人住宅建設
郡本遺跡群（第13次）（こおりもといせきぐんだいじ）	市原市郡本１丁目162番地（いちはらしこおりもとちょうめ）	12219	セ452	35°30′44″	140°07′17″	20090909～20090918	26.5㎡／265.36㎡ 確認調査 2㎡ 本調査	個人住宅建設
村上遺跡群門前地区（むらかみいせきぐんもんぜんちく）	市原市村上1427-5（いちはらしむらかみ）	12219	セ453	35°29′41″	140°05′53″	20090924～20091002	43㎡／422.14㎡ 確認調査 7㎡ 本調査	個人住宅建設
白船城跡（第６次）（しろふねじょうあとだいじ）	市原市山木1・265-11・17・18（いちはらしやまき）	12219	セ455	35°31′28″	140°07′44″	20091013～20091021	35.9㎡／359.49㎡ 確認調査 10㎡ 本調査	宅地造成
菊間遺跡群鍛冶屋前地区第２地点（きくまいせきぐんかじやまえちくだいにちてん）	市原市菊間字鍛冶屋前2810-3・2810-10の一部・2808-3の一部（いちはらしきくまあざかじやまえ）	12219	セ456	35°32′07″	140°08′36″	20091116～20091130	45㎡／445.34㎡ 確認調査 22㎡ 本調査	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山木遺跡群市道地区第２地点	包蔵地	弥生・古墳・奈良・平安	竪穴建物跡４軒、掘立柱建物跡１基、土坑３基、溝跡２条	弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦	昨年度調査に続き弥生時代後期と奈良・平安時代の集落跡を確認した。
郡本遺跡群（第13次）	包蔵地	奈良・平安・中世	竪穴建物跡１軒、土坑８基、溝跡１条	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、中世カワラケ、中世陶磁器	13世紀後半を中心とした大量のカワラケを含む大規模な溝を確認した。
村上遺跡群門前地区	包蔵地	中世～近世	土坑３基、ピット30基、溝跡２条	土師器、須恵器、中近世陶磁器	村上城跡の土塁内側の一角を調査した。
白船城跡（第６次）	城跡	中世	盛土造成層	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、中世陶器	白船城跡の裾部分において盛土造成層を確認した。
菊間遺跡群鍛冶屋前地区第２地点	包蔵地	弥生・古墳	竪穴建物跡3軒	弥生土器、土師器、石器	弥生時代と古墳時代前期の集落跡を検出した。

要　　約

今年度は５遺跡を調査・報告した。

山木遺跡群は昨年度に隣接地を調査しており、同一と思われる奈良・平安時代の掘立柱建物跡や竪穴建物跡を確認した。昨年度調査に比べて遺構・遺物共に希薄になりつつあり、谷への緩斜面であることが影響したものとみられる。

郡本遺跡群の調査では、昨年度調査に続き、中世の遺構が検出された。13世紀後半のカワラケ皿などを多量に含む大型遺構を確認し、中世の大規模造成が行われたエリアであることの事例を追認した。

村上遺跡群の調査は、国府推定地内かつ村上城跡内であったが、中近世とみられるピット群を確認するに留まった。また、白船城跡の調査区は、城跡の東裾部分であり、腰曲輪状の平坦面を造り出すための造成痕跡と考えられる盛土層が認められたものの、その規模を把握するには至らなかった。

菊間遺跡群は調査区内の土が移動したとみられ、遺構の残存度は良くなかったが、古墳時代前期及び弥生時代後期の竪穴建物跡を調査した。隣接地第１地点の調査や雲ノ境遺跡の成果と合わせて集落の展開を検討できる事例となった。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第16集

平成21年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成22年3月24日 発行

編　集　　市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489

発　行　　千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印　刷　　三陽工業株式会社
千葉県市原市五井5510-1